
太陽の瞳

黒崎メグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽の瞳

【Nコード】

N9643K

【作者名】

黒崎メグ

【あらすじ】

人と神々との交流がまだあった時代。

オシリスの残した最高神の座を巡ってホルスとセトの因果は尚も続いていた。

ホルスの『月』を司る瞳を抉り出し持ち去ったセトは、太陽の力が最も弱まる日蝕の日に向け、全てを支配するために動き出す。

そしてホルスもまたその野望を阻止するために動き出した。

だがそんなことは露知らず、平和に暮らしていた少年・カイはある日不思議な夢を見る。それ以来カイの周りでは不思議な事が起こり

始めるのだが――。

プロローグ（前書き）

* あらすじには古代エジプトと表記しましたが、古代エジプト風のオリジナル世界だと思って読んでいただけると有難いです。話の都合上エジプト文化に沿っていない部分も多々あると思うので。

また、この作品は五年ほど前に書き上げたものですので、文章の拙い部分は目をつぶっていただきたいです。

プロローグ

暗い、暗い部屋。

日の光の届かない私の部屋。

私は太陽の光を浴びたかった。

けれど部屋から出られるのは、月の輝く夜だけ。

セトや『暁』色の瞳を持つ義兄^{あに}は、その月を見てとても美しいと言っけれど。

私はそうは思わない。

あの輝きは真実の光ではないもの。

それは、私が一番よく知っている。

私がついそれをもらすと、もう一人の義兄^{あに}が複雑な顔をした。

そして、決まって彼は私の頭を撫でてこう言うの。

「いつかきつと——お前の望みは俺が叶えてやる。だから、お前は悲しむな」

私が一番望むのは、月が真実の光を宿すこと。

私は義兄のその言葉を疑ったわけではないけれど。

この思いのやり場に困って、毎夜毎夜歌を口ずさむ。

『月』は『太陽』の光を受けて輝くもの。

だから——

だから——

昼の空に輝く太陽にこの歌が届くことを願って、私は今日も歌う。

どうか——

どうか――

私にその輝きを

届けに来て

01 1 昼と夜、それぞれの胎動

暗闇の中、瞳が宿す光だけが怪しく宙に浮いていた。

「皆、揃っているな」

円を作るようにして浮く五対の光に、声の主は満足そうに呟きをもらした。

五対の瞳はこの場にはいない彼らの主に敬意を払うように伏せられる。姿は見えなくとも、たとえ声だけであっても、彼らにとつて主は絶対の存在だ。彼らの主・セトがいくら反逆神と言われていようともそれは変わらない。

五対の瞳は伏せられたまま主の次の言葉を待った。

「もうすぐ、時が満ちる。そして、私の支配する時が訪れよう」

「存じ上げております、セト様。我らはセト様の治める世をどれだけ心待ちにしてきたことか」

五対の瞳の一对、『暁』の色に似た真紅の瞳の主が熱の籠った声で言葉を紡ぐ。

「ふっ、そんなことはよく分かっておる。これまでお前達はよく働いてくれた。そして、今回の命が、私が反逆神としてお前達に下す最後の命となるだろう。皆、心してかかるように」

セトの言葉に五対の瞳の主達は、はっ！と見事に声を揃えて返事

をした。そして音もなく手元に現れた指令書を手にする。

「では、行くがいい。我が加護を受けし、幸福な民たちよ」
いっしょ

ギイイイイイと扉の開く音がして、室内に光が射す。

円卓から立ち上がった五人は光が完全に部屋を包まないうち身につけていた黒いマントのフードを被った。

五対の瞳の色はそれと同時に隠れてしまう。だが、代わりに彼らのマントの付けられた銀の留め具が射し込んできた光を反射してキラキラと光った。

模された紋様は狼。

それは彼らがセトに加護を受けた証。

そして、セトの加護を受けた夜の世界の住民は、昼の世界へと足を踏み出した――。

少年は、自分がおかれている状況を理解できなかった。

先ほどまで、少年は教室で、神話の授業を受けていたはずだった。それなのに、目の前で繰り広げられる光景は、先ほどまで聞かされていた神話の一場面。

人間を超越した力を持った感情豊かな神々が、亡きオシリスの跡継ぎの決定を喜ばんとしていた、まさにそのときのこと。

「私は認めない。この国を治めるのは私だ。お前ではない！」

欺かれ陥れられたと気づいた候補者・セトが、巨大な豚に姿を変え、彼の甥にも当たるもう一人の候補者・ホルスに襲い掛かった。

「ホルス！」

息子の危機にイシスは叫び、ラーを初めとするその他神々も息を飲んだ。

突然の襲撃に動作が遅れたホルスは、豚となったセトから逃げる事が出来なかった。

「私が裂き殺してくれる！」

ホルスの両眼から、紅い紅い花が散った。

耳に痛いほどのセトの高笑い。イシスの悲鳴。神々の怒号。そして、ホルスの絶叫が響き渡る――。

「あああああああああああああああああああああああああああああああつ！」

現実と見紛うほどの感覚を感じて、少年は思わず叫んだ。
次の瞬間。

もうあの神話の一場面は消えていて、目の前には神話の書かれた歴史書を持った先生が立っている。

「あ、ああ？ 夢？」

いまや教室中の視線を浴びている少年は、周りの光景に思わず間抜けな声を漏らした。

「あー………どうかしたの」

眉間に皺を刻み先生が聞く。

「どうもこうも——」

隣で頼杖の手を滑らせた少年は大きくため息をついたのだった。

ここは西の国。

正午を少し回った、太陽が一番元気な時間。

そんな中で、先ほど教室にいた十歳から十五歳まで子供達が、揃って遺跡の発掘作業をしている。

「めっちゃくちゃひでえの！」

昼の民特有の明るい色素の髪。なかでも、朝日のようなと村人達から称される眩しい金色の髪を、汗に濡れた頬に張り付けて、今年で十を数える少年・カイは続ける。

「昼飯も食ってないのに外に連れ出されて延々説教！ あれはないだろ……」

しばらく隣で聞いていたラオ——彼も十歳——は、オレンジがかった金髪を揺らし、つり上がり気味の目をさらにつり上げた。

「で、結局、何の夢を見たわけ？」

「さっきの授業でちょうど先生が語っていた神話の場面だよ。ホルス神とセトの最初の戦いの場面。毎日のように聞かされてきたからかな。とうとう夢にまで見ちゃったよ」

「まあ、俺たちは、家が家だしなあ」

この国には、国を守り治めている？ホルス神？にまつわる話がゴマンとある。

滅多に人界に姿を現すことはないが、つくりものでも迷信でもな

い。本当にいる神様である。

現在は国の中央、ウジャト神殿にしか神々は降りてこないが。

今、カイ達が発掘作業の手伝いをしているのは、曲がりなりにも、昔——まだこの国にも多くの草木が溢れていた時代——神々が地上に降りたときに使用したとされる神殿跡だ。

そして男たちは毎年出来た農作物を捧げ、女たちは生まれた子供に必ず神話を話してやる。

ただ、カイやラオは、孤児院で育ったため例外ではあるが。

ラオは、早くに親を亡くし。カイに至っては、親の顔すら覚えていない。

それは親の顔すら覚えられない赤子の時に孤児院にやって来たというわけでは決してない。十分に周囲の環境を察するに値する年齢に達してはいたが、カイには孤児院に来る以前の記憶がないのだ。

所謂、記憶喪失。

昔はそれを気にしたこともあった。それでも今は、カイはそれを悲しく思っていないし、その状態を不満に思っているわけでもない。そんなことを感じないくらいたくさんの愛情をもらって育ってきたからだ。

孤児院で父と慕われる存在——神官・ファトによって。

そしてその神官ファトこそが、カイ達に神話を聞かせてきた張本人だった。彼の職業柄、一般家庭より多く神話を聞かされてきたような気がする。

「授業で神話の勉強が入ってきてからも、ファトの何かにつけて神話を読み聞かせる習慣って変わらないだろ？ まあ、ファトが神話を話してくれるのは、俺達への愛情表現なんだってわかってはいるんだけどさ」

「なんだかんだ言っつて、お前、ファトのこと大好きだよな」

呆れたように言いながら、ラオは砂の中から大きめの石を掘り出

し、ふっと息を吹きかけた。小さく模様が彫つてある。

けれどこの遺跡には、谷から切り出された自分たちの背丈――

ラオは百四十センチ。カイに至つては小柄なため百三十二センチだ――
――ほどもあるう赤茶の四角い岩が点在している。それらの岩はこの遺跡の礎だったのかもしれないし。なにかの儀式のためのものだったのかもしれない。はつきりした使い道はわかっていない。だが、そのどれもに絵とも、字ともつかぬ模様が描かれている以上、こんな石は特に珍しいものでもないのだ。ラオはしばらくそれを眺めた後、普通の石を川へ放るような仕草で籠に放った。

ラオがそんな作業をしている間にも、カイは一人愚痴をこぼし続ける。

「それは否定しないけど、ソレとコレとは別。ほんつともう俺教育方針にブーイング出していい？　ていうか出すよ――」

と、カイのお喋りが止まり、ぱつと顔を上げる。髪色より少し濃い金色の眼が向いているのは闇の森に程近い一画だ。

「呼んでる……？」

「え、何？　どうかしたのか？」

カイのあまりの真剣さに、ラオも手を止めた。

「話に夢中で気付かなかったけど、ここじゃなくて向こうに何かあるような気がしたんだ」

カイには不思議な力がある。発掘作業において歴史的意味の深いものをよく発見するのだ。

「やっぱり、あっちに何かある」

その才能がどういう風に培われたものかは定かではない。神官である自分たちの養い親と寝食を共にしているからだとか。よく神殿に出入りしているんなものを見ているからだとか。理由は多く考えられる。だが、その場合自分にもそんな才能が備わってもいいはずだ。だったら、カイの失われた記憶が関わっているのか……。

いや、仮にそうだったとしても、やはりラオは思わずにはいられないのである。

カイは特別だ、と。

「なあ、ラオ、行ってみようよ！」

カイの言葉に我に返ったラオは、小さく身震いした。

カイの指差す先は、本当に闇の森の目と鼻の先だ。

闇の森。この国の多くが砂に包まれる前、神々がまだ地上に多く降りてきていた頃の名残を残すその森は、異様な雰囲気放っている。

その中には見たこともないような動物が多く住み着き。また荒々しい輩もたくさんすんでいるという。人々は決してあの森に近付こうとはしない。唯一入っていくのは鷹だけだ。あの中には鷹の餌になる生き物がたくさんいるのだろう。

そしてもつと恐ろしいのは森の奥。ラオやカイ達？ 昼の民？ とは生きる時間を違える？ 夜の民？ が住んでいるのだ。

日の出と共に起き日の入りと共に眠る？ 昼の民？。

その逆で日の出と共に眠り日の入りと共に起きるのが？ 夜の民？。同じようにホルス神が治める国ではあるが、？ 夜の民？ は殆どセト神の支配下にあり、一瞬でも気を抜くとんでもないことになるらしい。

それはラオの母親が亡くなる前、ラオがまだ孤児になる前にしてくれた話で、ラオは結局とんでもないことが何なのか聞けずじまい

だった。

「なあ、本当に行くのか？」

ただでさえ、近付きたくないのに。もう、日暮れも近いこの時間に、闇の森に近付くのは勘弁して欲しい。

「だって、さっきからうるさいくらいだから」

何が、とは聞かない方がいいのだろうか。この場合。

「なあ、カイ。今日はもう止めておけよ」

「でも……」

「ああ、もう！ お前が何を感じたかは知んねえけど。今日は止め！ 明日は学校休みだし、明日の朝から付き合ってやるから！」

半ば自棄になりラオが怒鳴る。

そんなラオに、

「約束だからな」

と、この先に待ち受けるモノも知らずカイは無邪気に笑った。

その晩。

夢の中でカイは一人遺跡に佇んでいた。

昼間にもかかわらず発掘作業を行う人影はない。そのことを不思議に思いながら、カイは歩を進めた。けれど、急に襲った胸の痛みに、胸を押さえて立ち止まる。

胸の痛みで呼吸が儘ならない。次第に早くなる鼓動。元気だけが取柄のカイは初めて感じる痛みに不安が募る。

水でも飲めば落ち着くかもしれない。

そう自分に言い聞かせて、発掘作業のために整備された飲み場——地価水路を流れる水を石を積み上げて囲いまで引いたもの——に足を向ける。枯れることなく供給される水に手を触れると、少し落ち着いたような気がして、カイは手をすんだ水で清め、すくった水を口に運んだ。

だが。

その拍子に目入った水面に、カイは異変を感じ取った。

水面で揺れる太陽の照り返しが次第に弱まっていく——。

視線を頭上に移すと、太陽がなにか影のようなもので覆われていた。雲に覆われた場合と違い、太陽の形ははっきりと確認できる。しかし、いつも感じていたはずのその暖かい陽射しを感じる事が出来なくなってしまったのだ。

カイは慌てた。

昼の民は太陽が在ってこそその民である。

このまま太陽を失ってしまったら……。

セトが支配する夜の世界を想像し、ぶるつと身震いをする。

そんなことさせるわけにはいかない。

カイは急ぎ村に知らせるべく駆け出そうとした。だが——ズキンッ——再び胸の痛みが襲う。

ズキンッ、

ズキンッ、

ズキンッ——

「う、あ——」

胸の痛みをとりだされていたカイは、足元の石に気付くことが出来ず盛大に転倒した。膝に帯びた熱を感じ、見れば血が出ている。

それでも、カイは村に知らせようと立ち上がろうとするが。

ズキンッ――

途端、一際大きな胸の痛みがカイを襲って、カイは立ち上がるこ
とが出来ず再び地に伏した。

「このままでは……」

弱弱しく呟きをもらす。

その声に答えるものなどいない。そう思っていた。
だが。

――。

「……歌？」

静かな、澄んだ歌声。

カイの呟きに答えるようにして歌声が響いてくる。

カイは、その歌声に励まされるようにして、やっとの思いで上体
を起こすと、歌声のする方へと目を向ける。

そして――

カイは言葉を失った。

真っ先に目に入ってきたのは腰まであろう豊かな銀髪。その髪を
揺らし、透明感のある白い肌に朱をさした美しい少女が、空を見上
げ涙を流し、薄紅色の唇から歌を紡いでいる。

「君は……誰……」

歌の邪魔をするのは悪い。そう思いながらも、カイはその疑問を
口にするのを止めることが出来ない。少女はそこでやっとカイの存

在に気がついたのか、涙に濡れる目がカイへと向けられる。

私は――

「――カイ！　おい、カイったら、起きろよ！」

消え入りそうな声で少女は自分の名を口にしようとしたが、その名を聞く前に加わった衝撃にカイは覚醒せざるを得なかった。自分の体を容赦なく揺すった犯人であるラオを睨み付けて、カイはゆっくりと上体を起こす。

「うるさい」

まだ声変わりの終わっていないボーイソプラノの声で凄んだところで、効果はあまり期待できない。けれどラオはそんなカイの反応を予測していなかったらしく、引きつった笑みを向けた。

「せっかく今日も起こしに来てやったのに、礼の一つもないのか？　これが他の朝ならカイだって心から礼を述べただろう。はつきり言ってカイは寝汚い。そのため、誰かが起こしに来ない限り、いつまでも寝ていてしまう。」

だから起床時間を過ぎても起きてこないカイをラオが起こしにくるのはもう習慣に近かった。そして、それはとても有難いことなのだが。

今日は事情が違う。

もう少して少女の名を聞けたのにラオのせいで聞けず仕舞いだっただの。

カイは不貞腐れるように、起こした体を再び布団に投げ出した。もう一度眠れば、またあの少女に出会えるだろうか。

そんな淡い期待を抱いて再び目を瞑る。

「おいおい、今日は昨日彫れず仕舞いだった現場に行くんじゃないかなったのかよ」

だが、その一言に、まどろみの海に漕ぎ出しかけたカイの意識は再び岸へと引き戻された。

「行く！」

遺跡への道すがら、ラオは恨めしそうにカイを見詰めた。

「まったく、カイが寝坊なんかするから、こんな一番暑い時刻に作業する羽目になったんだぞ」

学校が休みということ、まだ涼しい朝型に作業をするはずだった。けれど、日は既に高い。

「だから、悪かったって何度も謝ってるだろ」

「そんなこと言うと、手伝ってやらないぞ」

汗を拭いながら、カイが呟く。暑さのせいで互いに機嫌は最悪だ。ラオに至っては、乗る気じゃないだけに、殊更である。ラオは勢いで言った昨日の言葉を悔やむざるを得ない。

「何だよ、ラオ俺の勘が信じられないのか？」

先に行くカイは足を止め、振り向く。

「いんや、カイの力は認める。だけど、場所が場所だからなあ」

「闇の森の近くだから？」

「まあ、そんなところ。というか、お前はわりかしさっぱりしてるよな」

「だって、森に入らなきゃ大丈夫だろ？」

「ファトに散々脅されたから、俺は生理的に受け付けないんだよ！でも、同じ孤児院で育ったのにお前ときたら……」

「嫌ならラオは帰れよ！俺一人で行くからな！」

肩を竦めるラオに、カイは背を向けた。

「お、おい！」

背後で、ラオの困り掛けた声が上がったが、気にせず足を速めると――

『

』

響く。

重く、重く、重く。

脳裏に。

昨日聞こえたものと同じだ。それはどこか懐かしさを覚える。

やはり、呼んでいる。自分を。

招かれるまま――一歩。

だが。

「……お、くう……」

途端、眩暈に襲われた。

カイは体を支えることも俛ならず、そのまま顔から地面に倒れこむことを覚悟する。

「カイ！」

けれど遺跡の岩陰から、にゅっと腕が伸びてくる。

一瞬、自分の名を呼んだラオのものかと思う。しかし。

「大丈夫か？」

声変わりの終わった低い声だ。

見れば、薄汚れた砂除けのマントを纏った見知らぬ男が自分の体を支えるようにして、腰に腕を回していた。

「あ、ありがとうございます！」

カイは礼を述べ体勢を整えようとしたが、眩暈は治まらず再び男の腕の中へと倒れこむ。

「すみません。すぐに起き上がりますから」

恥ずかしさに顔を赤く染めカイは謝った。砂除けの布で口元が覆われているため、男の表情は読み取り辛かったが、男はどうやら苦笑しているようだ。

「いや、構わない。それより、水分を取って木陰で休んだ方がいいだろう。おそらく軽い日射病だ」

「カイ、大丈夫かよ」

男はカイの体を支えながら、僅かな岩陰に移動する。すると、ラオが駆け寄ってきた。とても心配そうな顔をしている。

「大丈夫。ごめん、心配掛けた」

「いや、良いって。でも、今日の発掘はなしだからな」

二人して笑いあうと、横から袋状の何かを差し出された。
羊の腸で作られた水筒だ。

「水だ。私の飲み掛けで悪いが飲め」

カイは水筒と男の顔を交互に見比べる。けれど、このままこうしていても仕方がないのでその水筒を有難く受け取ることにした。

水筒に口を付けたカイは、一口——ごくりつ、と喉を鳴らして水を飲む。

男の水筒の水は生ぬるかったが、湧きたての冷たい水を飲んでいくような感覚に襲われて、カイが夢中で水をあおった。そして、自分がどれだけ喉が渴いていたのかこの時やっと自覚した。

「落ち着いたか？」

カイが水筒から口を離したのを見計らって、男は口を開いた。

「あ、はい、ありがとうございました——」

でも……とカイは申し訳なさそうに手にした水筒に視線を落とす。水筒は随分と軽くなってしまっている。遠慮する余裕などなかったのだ。

「問題ないさ。ちようど村に行くところだったからな」

そう朗らかに言うと男は、カイの手に水筒を残したまま、「じゃあな」と村に足を向ける。

「何だっただよ、あいつ……」

次第に遠くなっていく男の後姿に、ラオが呟く。

カイは言葉を返すこともなく、男の後姿を追っていた。

男の出で立ちの旅装であつた。だが、どうして旅人がこんなところに現れるのだろう。

カイの住む村は割りと小さな村だ。ホルス神を祀る神殿を中心に、その隣に孤児院。大抵の家は自給自足で作物を作っているので、神殿から南へのびる大通りには、最低限の生活必需品が手に入る商店がぼつんぽんと並び、同じ通りに飲み屋も兼ねた宿屋が一つあるのみ。そして、村への入口は限られており、神殿からのびる大通りだけ。その唯一つの入口から旅人が訪れたとなれば、この小さな村で噂になるのは必然。さらに、大抵の旅人は一番最初に神殿を訪れ、これまでの旅の無事を感謝し、これからの旅の無事を祈るのが風習となっている。

要するに、カイ達村の者が旅人の存在を知るよりも早く神殿を挟み村の真北に位置するはずの遺跡を訪れることなどあり得ないのだ。

もし、村人に知られることなく現れたとすれば、それは遺跡のさ

らに北、闇の森の向こう——夜の世界からの訪問者だけ。

そういう予測に行き当たって、カイはその考えを打ち消すように頭を力強く振った。自分を助けてくれた人物を疑うことは出来なかった。

白い大理石で作られた回廊を足音もたてずに大聖堂に向けて歩く。ここはホルス神を祀る数々の神殿の総元締めであり、ホルス神が唯一地上へ姿を現す場所——彼の神の名を冠するウジャト神殿。白を基調にしたこの神殿はなんとも物静かで重厚な造りだ。大人の二、三人でやっと囲めるほど大きな石造りの柱により支えられている。また、大理石造りの回廊が冷たい印象を与えていると言えた。

とは言え、天井の高い位置に設けられた複数の飾り窓から、太陽の光が目一杯差し込むように工夫されているため、石の冷たさはそれほど気にならない。

いや、飾り窓以前に、この神殿では各地から集まった神官達が修行に励んでいるのだ。その信仰深い神官達の熱気がそうさせているのかもしれない。

またこの神殿にはそんな神官達の長たる神官長が常駐している。

そして、セフィアを呼んだのもその神官長だった。

けれど——

セフィアは神官ではない。

神官と同じように白を基調とした服——黒いアンダーの上に、腕を隠さないように脇のあいた白い貫頭衣を羽織り、腰には包帯ほどの太さの腰紐を巻いて、肩まわりは白いショールで隠されていた——を身に纏っているが、その胸や腕には神官が決して身に纏うことのないような煌びやかな装飾が揺れている。

先ほどから煩いくらいに足音をたてた神官達とすれ違う度、その顔が顰められる様を思い出して自嘲気味に笑った。

自分は拙い娼婦にでも御見えになったのかな。

セフィアは、この神殿に居ることは少ない。だから多くの者は、自分を男だとは気付かれてはいないだろう、と思う。

まるで鼈甲細工のように繊細で、艶やかな蜂蜜色の長い髪。

雲ひとつない空を思わせる、澄んだ瞳。

旅慣れている割には、日焼けの少ない白い肌。

一見。

容姿だけをとると、セフィアは清潔感漂う乙女のようなであった。

けれど、胸元に揺れる装飾具とセフィア自身の放つ不思議な威圧感が、どうしてもそれを否定する。

だから、神官達の勘ぐりは安易に予想できた。

女と見紛うほど美しき神子・セフィア。

それが、セフィアの正体だった。

神子は神々に舞を捧げ、その身をも神に捧げる者。

歴代の神子の中でも最高の舞手と称される神子・セフィアは壁に飾られたホルスの肖像画にちらつと目をやった後、大聖堂に急ぐべく足を速めた。

「セフィア、遅かったではないか！」

広い大聖堂でただ一人、ホルス神の像の前に跪き祈りを捧げていた神官長は、セフィアの気配を感じ立ち上がった。父と旧知の仲である神官長からは、言葉では責めていても、セフィアの登場を喜んでいる節がありありと窺える。

「遅れて申し訳ない。ですが、それでも父から連絡を受け、旅先から慌てて帰ってきたんですよ」

「また世界を見るため旅に出ていたのか？」

「ええ、私の舞は瞳を失ったホルスに世界の状態をお伝えする為のもの。日頃から世界を見詰めていなければホルス神の心に響く舞は舞えませんから」

セフィアの話の節々に出てきたホルス神の名に神官長の肩が揺れた。この人は人の上に立つ以上、自分の考えを安易に人に探らせない術や悟らせない術を学ばなければならないな、と思いつつ、セフィアは言葉を続ける。

「で、急ぎ私を呼び戻すとは、何があつたのですか？」

神官長は言い難そうに自らの髭に手をやり、無造作に髭を撫でながら辺りを見渡した。そうして人影がないことを確認し、セフィアに顔を近付ける。

「ホルス神が降りてきていらつしやる。大切な話があるそうだ」

神官長がホルス神の像の足元にあつた敷石の一つを強く押した。するとゴゴゴゴゴと何か重たいものが動き出す音がして、足元に目を向けると地下へと続く階段が現れる。

準備が良いことに、神官長は祭壇に置かれた燭台に火を灯し、一つをセフィアに渡した。

降り立つ回数自体は少ない。とはいえ、本来この大聖堂に堂々と降り立つことの多いホルスが態々人目を忍んで、話さなければならぬこととは何だろう。セフィアは燭台を受け取ると、柄にもなく緊張に体を強張らせ、地下へと続く階段に足を踏み出した。

「やあ、セフィア、久しぶりだね」

何段もの階段を延々と降りて行った先、地下とも思えぬほど明るい部屋で、ホルスはそうのたまった。それも、緊張していたことが馬鹿馬鹿しくなるほど鮮やかな微笑を浮かべて。

もしかしたら、この微笑みと彼の放つ神気が部屋を思った以上に明るく見せるのかもしれない。そう冷静に分析しかけて――

「って、何が、久しぶりだね、だ。人を呼び付けておいて、自分は何寛いでいやがるんだよ」

セフィアは手にしていた燭台をテーブルへと叩き付けた。

突然変わったセフィアの雰囲気、後から降りて来ていた神官長は部屋に入ることもできず立ち尽くしている。

ホルス神の怒りをかうのではないかと内心気が気でないようだ。

「あはははは――随分な言い様じゃないか、セフィア。ちつとも変わっていないな」

だが、そのような心配は無用とばかりにホルスは声を上げて笑い――立ち上がると、セフィアに手を伸ばした。目の見えないホルスが何を頼りにセフィアの正確な立ち居地を把握したかは知らないが、ホルスの手は迷うことなくセフィアの顔に伸び、その輪郭を確認するかのように顔の上を優しく撫でたのである。

セフィアは黙って、暫しの間その行為を受け入れていた。

「うん、やはり、セフィアは変わっていない」

数分してホルスは満足したのかセフィアから手を離すと、再び椅子へと腰を落ち着けた。

「当たり前だろ。そうそう顔の形が変わってたまるか！」

「違うよ。顔が——ではなく気がだ。セフィアの気は心地よいし、世界の状態を如実に伝えてくれる。いつもありがとう、セフィア」

ホルスの素直な感謝の言葉に、気恥ずかしさを覚え、セフィアの顔が赤く染まる。

「そんなこと当たり前だろ。俺はお前に遣える神子なんだからな」
「ああ、だから私の神子でいてくれてありがとうといっているのだよ」

いつもはこうしてお礼を述べることなどないホルス。神だから真実以外を口にするのではない。けれど、口にする言葉を選ぶホルスが素直に礼を述べたことに、セフィアは少々違和感を覚えた。

「今日のお前何か変だぞ」

その違和感を迷うことなく口にすれば、ホルスは湛えていた微笑みを収め、俯いた。

「そうかもしれないね……」

返ってきたのは——

またも。

素直な言葉。

そして俯けていた顔を、ホルスはゆっくりと上げた。

「さて、そろそろ本題に入ろう。長い話になる。二人とも座りなさい」

「日蝕の日が近付いている」

ホルスの話はその一言から始まった。

ここ数百年訪れることのなかった現象の名に、セフィアと神官長は顔を見合わせ、首を傾げる。

太陽が影に隠れ、その光が地上にしばしの間届かない日蝕という現象自体は知っている。

しかし、その現象が起こる日が近付いていることに何をそんなに危惧するのか。

だが、その疑問はホルスの次の言葉で打ち消された。

危惧する要因は十分すぎるほどあったのだ。

「日蝕——それは、唯一太陽の力が弱まる日だ。そんな日をセトが見逃すと思うか？」

セト——ホルスとの戦いに敗れ北の地に去っていった、ホルスの叔父であり、先代最高神の弟に当たる存在。

兄の跡を継ぎ最高神となることを望んだセトは、一度はホルスとの戦いに敗れはしたものの、太陽と月を司るホルスの両眼を抉り出しホルスに深手を負わせると、月の瞳を持ち去り、未だホルスから最高神の座を奪おうと隙を狙っているというのである。

しかも、一部では現在この国が少しずつ砂に覆われつつあるのは、そのセトが持ち去った月の瞳の力によってめっきり降雨が減ったからだという見解もあった。

「セトは私の片眼、月の瞳を持ち去っている。最悪の場合、その力

を使い、太陽の光は一生失われ、夜の闇に覆われた世界に変えてしまうかもしれない」

「何だと。ホルス、もう一度言ってみる——」

ホルスの言葉に黙って耳を傾けていたセフィアだったが、ホルスの放った一言にこれ以上我慢できないとテーブルに拳を打ちつけ立ち上がった。あいた方の手は迷うことなくホルスの胸倉を掴み、セフィアはあらん限りホルスに顔を近付けると、平静を保っているホルスの顔を睨み付けた。

「セフィア、少しは落ち着いたらどうだ。君らしくもない」

一人おろおろする神官長を他所に、当事者であるホルスは落ち着いてセフィアに腕を解かせる。セフィアは、ホルスの言葉に今の自分がただの八つ当たりにはしか見えないことに気付き、チツと舌打ちをすると、すんと力なく椅子に倒れこんだ。

「らしくなかった——のは認めるよ。だけど、そんな話を聞かされて落ち着いていられる訳がない」

「まったく、下手な混乱を招かないために、お前達二人だけに話すことを決めたというのに……セフィア、お前が取り乱してどうする。やはり、お前はまだ若いのだな。見よ、神官長のこの落ち着き様を」
「若くて悪かったな！ おじさんの場合はシヨックで口が聞けないだけだろ。それに、お前が混乱を避けるために秘密裏に降りてきたことくらいわかってるさ」

先ほどから一言も言葉を発していない神官長にちらつと視線をやったセフィアは、軽口をたたける程度には落ち着きを取り戻している。

「それで、そのセトの企みを阻止する方法はあるのか？」

「あることには、あるな——太陽の瞳を見つけ出し、月の瞳を取り戻すことだ」

「太陽の瞳と月の瞳を？　月の瞳はセトの手の内だし、太陽の瞳は行方知れずって聞いたぞ」

「ああ、そうだ。だが、太陽の瞳の在り処はわかつている。あれはセトの持ち去った月の瞳が与える影響を軽減するために秘密裏に地上に降ろされたのだよ」

まるで人事のように自らの瞳のことを語るホルスに、セフィアは呆れたように溜め息を吐いた。太陽の瞳、もしそのホルスの片眼が地上に降ろされていなかったなら、自分はこの神の神子にならずに済んだのではないか。そう思うと、少々憎たらしい。

「で、その太陽の瞳はどこに？」

「夜の世界との境界に位置する村に——太陽の瞳を手に入れ、月の瞳を取り戻しに行くには好都合だろ？」

ホルスの物言いにセフィアは再度溜め息を吐いた。その物言いから察してしまったのだ。

「お前、俺にその役目を任せようとしてるだろ」

「よくわかったな」

「あまりわかりたくもなかったけどな——というか、お前自身が動くのが一番手っ取り早くないか？　何でお前が率先して動かないんだよ！　いつもなら人頼みになんかしないだろ」

「私とて、そうしたいのは山々だ。だが、神——とて、万能ではない。今回の件で、神界の方もバタバタしている。私が長らく留守にする訳にはいかない。それに、両瞳を持たぬ私は、今、刻々と伸びつつあるセトの脅威から我が民を守るのが精一杯なのだよ」

滅多に聞けないホルスの弱音に、セフィアはホルスの苦悩を改めて理解したような気がした。

02-1 悪夢を誘（いざな）う訪問者

昼の民であるこの村の人々は、日が沈むと同時に眠りに就いた。宿屋の酒場をはじめ、村全体が静けさに包まれたように感じる。

けれど早過ぎるのではないかという時刻に夕食をとり、部屋に戻っていた旅人——クロウは、眠りに就くことはなかった。

おりてきた夜の帳に、日中決して脱ぐことのなかったマントの留め具を外し、ゆっくりとそれを脱ぎ捨てる。

軽くなつた身を確かめるように伸びをしてベットに倒れ込むと、日の香りのするシーツに漆黒の髪が映えた。

これから一仕事しなくてはならない。だが、旅で疲れた体を休ませるには横になるのが一番いい。

そして何より——

夜の民であるクロウには夜を迎えるこの瞬間が最も心地良かった。自然と抜けてきた力に、昼間は意識のうちに緊張していたのだな——と自嘲気味に笑みが浮かんだ。

孤児院に帰り着き、部屋で休んでいたカイは、ラオと共に夕食の席についた。

食卓に並んだのはいつもと同じようにパンと野菜のスープ、そしてもう一品——珍しくもスパイスにきいた魚の煮付け。現在この

孤児院にはカイとラオを入れても、五人の子供しかしないが、育ち盛りの子供を抱えた孤児院では限られた食費で遣り繰りするのは大変難しい。だからタンパク源としては大豆などの豆類が多く用いられるのだが、今日は一ヶ月に一度あるかないかの魚料理——子供達は思わず歓声をあげた。

カイも嬉しい驚きに顔をほころべながら隣に座るラオを見やる。ラオはカイと目が合うとウィンクをした。

「今日、カイが暑さで倒れたことをファトに報告したんだよ。そして、この通りさ——精を付けろってことだね」

カイは自分をだしに使われたことに、ほんの少しの反感を覚えたが、目の前の料理にそんな思いはすぐに吹っ飛ばされる。自然と口の中には唾液が溜まってきていた。カイはその唾をぐくりと飲み込むと、夢中で料理に食いついた。料理はあつという間に子供達の腹に納まっていった。

そして人間誰しも腹が満たされれば眠くなる。

ちようど、日が地平線へと沈む頃、食器の後片付けまできちんと終えて、カイを含む子供達は床に就いた。

昨夜の少女ともう一度会いたいと願ったからか、再びカイは夢を見た。

夢の中、カイは再び遺跡に佇んでいたのである。だがあの少女の姿はなく、しかも昼間の遺跡でもない。昼の民であるカイは実物を目にしたことはなかったが、書物でなら伝え聞いている。

カイの頭上に浮かぶもの——月。

甘く、優しくも、どこか悲しい光を放つ存在。

夜の闇に対する恐怖も忘れ、カイは月に心惹かれた。

それは――

恋心に近いかもしれない。

その心を証明するように、不思議と少女に会えない悲しみはなく、月を見て、少女がそこにいるような感覚に襲われる。

カイは暫しの間、月と見詰め合っていた。

静かな逢瀬――。

言葉を交わすことはなくても、カイは満たされていた。

頭上に浮かぶあの夢い存在が、自分の求めていた存在――自分の半身、だとさえ思われた。

と、その時。

ガサガサガサ、と茂みの揺れる音がした。

カイは後ろ髪を引かれながらも月から目を離し、静かな逢瀬を邪魔する存在へと目を向ける。

茂みから飛び出してきたのは、一人の男だった。

月の光の下、黒髪がより深い輝きを放ち、日に焼かれていない白い肌は不健康だとさえ思えるほど青白く見えた。

自らの存在を見咎められた男は、驚いたように目を丸くする。

カイはその目に見覚えがあった。

その目は――昼間自分を助けてくれた旅人のものだ。

「……………」

「お前には、私が見えているのか？」

カイが事実気付き男をじっと見てみると、男は腕を掴みカイに詰め寄った。

掴まれた部分が痛い。

カイは男の手を振り払おうとしたが、子供であるカイが成人男性の力に敵うはずもない。カイは早々に諦めると、男の問いにコクリと頷いた。

男は、信じられない、と眉間に皺を寄せたが、カイは男の問い自体に眉を顰めたかった。いや、実際眉間に皺を寄せていたのだろう——カイの表情に、男はすまなかったと腕を放した。

「お前には私が見えるのか、ってどういうことですか？」

男に掴まれていた部分を擦りながら、我慢出来ずに、今度はカイが問い掛けた。

「お前には関係ない」

男はその質問を突っぱねる。それでも負けじとカイは追い討ちを掛けた。

「でも、ここは俺の夢でしょ？あなたは俺の夢で何をしているの？」

男は息を呑んだ。

けれど——

「それを話すことは出来ない。だが、一つだけ忠告しておこう。早く目覚めることだ——悪夢を見たくないなら、な……」

忠告を残し、あたかも今までそこに存在していたのが嘘であるかのように、男は忽然と姿を消した。否、男はその場から消えたのではない——カイの意識が夢から引き上げられたのだ。

カイは、ぼーっとする頭で天井を見詰めた。

カーテンの隙間から外が見えたが、まだ暗い。夜明けの時刻ではないようだ。今まで一度として夜明け前——夜中といえる時刻に目覚めたことのないカイは居心地の悪さに身震いをする。同時に、妙に喉の渇きを感じた。夕食に食べた魚料理のスパイスのせいだろ

う。そう結論付けると、喉の渇きがより顕著に意識されて、カイはベッドの上で身を起こした。

「水……」

暗闇に続く部屋の出入り口を見詰め、どうしたものか、と思案するが、どうにも喉の渇きは収まらない。

そこで、ひたり——と、素足を床に下ろす。

ひんやりとした感触に目が覚めてきた。日中との温度差から寒いとさえ感じる空気に、ベッドから毛布を引き抜くとそれで体を包み、カイは階段を下りていった。

そして下りて行った先。

カイは、微かに耳に届いた呻き声に足を止めた。

呻き声は、台所と廊下を挟んだ向かい側、ファートの書斎兼寝室から聞こえてくる。ファートの私室に入るのは許されていないが、カイは僅かな好奇心とファートを心配する気持ちから、恐る恐るドアノブへと手を掛けた。

「ファト？」

そっとドアを開けると、はつきりとした呻き声が聞こえて、カイはびくんつと肩を震わせた。

それでもドアからではファトの様子を確認することは出来ず、ゆっくりと部屋の奥——ファートのベッドへと歩み寄る。

「——ひ、い」

そして。

カイは声にならない悲鳴をあげた。

そこで目にしたのは——恐ろしいほど顔を歪め、胸元を押さえ身悶えるファトの姿だった。

早く目覚めることだ——悪夢を見たくないなら、な。

夢の中、男が言った言葉が脳裏を過ぎった。

「悪夢……」

いつも穏やかで、笑顔を絶やさなかったファトが、苦しみに顔を歪める姿に、カイは純粹に恐怖を覚えた。出来ることならこの場からすぐにでも逃げ出したかった。しかし、ファトが苦しんでいるのを放っておくことは出来ない。カイは、勇気を振り絞ると、仲間に助けを呼ぶべく階段を駆け上がる。

「ファトが！ファトが大変なんだ！」

けれど、辿り着いた先で耳に届いたのは、またも——呻き声。部屋という部屋からそれは響いている。

嫌だ、嫌だ、

嫌だ、嫌だ、嫌だ、

嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ嫌だ

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い怖い怖い怖い怖い怖い——

カイは呻き声が聞こえないように耳を押さえた。

それでも耳について離れない呻き声から逃れたい一心で、カイは自室に駆け込み、頭からすっぽりと布団を被る。

目を瞑れば、魘されているファトの姿が思い出されて、再び眠り

に就くことも出来ない。

カイは、恐怖に震え、
眠れないまま——夜を、過ごした。

そして翌朝。

ほとんど眠ることなく夜を明かしたカイは、カーテンの隙間から太陽の光が射してくると同時に、気だるい体を布団から起こした。やっと迎えた朝が心地よくて、カーテンを開け放ち、全身に朝日を浴びる。優しく全身を包む太陽の光が昨夜の恐怖を忘れさせてくれるような気がした。

「カイ、おはよう……」

ドアの向こうに現れた気配に目を向けると、ドアが開く。少しやつれた感じのラオが顔を覗かせた。

ラオの顔を見た刹那——

昨夜の呻き声がフィラッシュバックして、カイはあからさまに顔を逸らした。

ラオはカイに反応に顔を顰める。

「何だよ、カイ。どうかしたのか？」

「何でもない……」

平静を装って答えたカイに、ラオは尚も怪訝そうな顔をしていたが、溜め息を吐くと、カイに歩み寄り——抱きしめた。
その存在を確かめるように。

「——ん、な、何するんだよ！」

カイはいきなりのことに耳まで真っ赤に染めて狼狽した。
自分とラオとの体の隙間に腕を入れ押し返そうとするが、ラオは力を強めるばかりで決して放そうとはしない。

「ごめん。でも……もう少しこのままで居させて……」

背丈はあまり変わらないため、ラオが顔の横でポツリと呟いた呟きを、カイははっきりと聞いた。

「ほんと、どうしたんだよ……。何かあったのか？」

動きのとり辛い体を、つい、と首だけ傾けてラオに目を向ける。
冷静になってくると、ラオの体が震えていることに気がついた。

「……怖い……夢を見たんだ。お前も、ファトも孤児院の皆も、誰も居なくて……俺……一人ぼっちで……」

孤児である自分達は、家族のいない悲しみを十分過ぎるほど理解している。

そして、一人になることをとても恐れている。

「悪夢——か」

ラオの背を、大丈夫だ、と擦ってやりながら、カイは無意識に呟いていた。

自分がもしあのまま眠りの中にいたならば——悪夢を見たのだろうか。

——それは考えても仕方がないことだ。

それ以上に考えなければならぬことがあるのだから。
自分に忠告をしたあの男。

あの男のおかげで——悪夢を見ずに済んだ。
そう——あの男のおかげで……。

あの男——あの旅人はいったい何者なのだろう。

男の顔を思い出し、カイは、心の中で呟いた。

「太陽の瞳——」

カーテンを締め切り、光一つ入らない暗闇の中。

クロウは——おもむろに、呟く。

昨夜夢の中を駆けすぎたため、少し喋っただけでも体の節々が痛む。その痛みを少しでも和らげようと体の力を抜く。最近、昼夜逆転の生活を送っていたため疲れの溜まる体では、これ以上昼間に起きていることは無理そうだ。

自然と湧き起ってくる睡魔に身を任せ、ゆっくりと——目を瞑る。

すると。

脳裏に、一人の少年の姿が浮かんた。

あなたは俺の夢で何をしているの？

少年は確かに自分を見つめ、そう言った。夢を駆ける夢魔の姿は、夢の主には見えないにも拘らず——。

だから、か——その少年に興味が湧いた。

否、それ以前に、少年が自分の大切な人に、どこか似ていたからかもしれない。

——自分は、その少年を助けてしまった。
自分の使命は、太陽の瞳を見つけ出すこと。
ただ。

それだけ。

だから——

少年が自分に興味を示し動き難くなるのはまっぴらごめんだ。

あの日のうちにウジャト神殿を出立して、セフィアは商業の町、
《女神の涙》の町に辿り着いていた。

何度かこの町を訪れたことのあるセフィアだが、何度来てもこの
町は飽きることがない。

一言で言うならば、色で溢れているのだ。

砂よけのマントや日除けのショール。行きかう人々の服装は勿論。
商業の町と謳われるだけのことはある。様々な地域の色鮮やかな野
菜やフルーツ、はたまた織物が大通りに沿った露天の店先に並ぶ。
物資と人が行き交う街は、市の立たない日はなく、賑わいは途絶え
ることを知らない。

そんな賑わいの中。露店のうちに、一際目を引く鮮やかなフルー
ツをかご一杯に詰めた果物屋が目に残った。

「オレンジを一つ頂けますか」

暇を持て余し、たつぷり生やした顎鬚を弄っていた老年の男は、
セフィアの姿を見て、愛想良く笑顔を浮かべた。

「一つでいいのかい、お嬢ちゃん。なんだったらおまけしておくよ」

お嬢ちゃんって——おい、おい……。

整った自分の容姿は理解している——が、自分はそんなに幼く
見えるのだろうか。内心むっとしながら、表面あくまで嬉しげに、
セフィアは微笑む。

「本当ですか——嬉しいな」

でも、まあ、いつか。おまけしてくれるって言ってる訳だし……。と、思うことにする。

セフィアは、裏表の性格の差が激しい——それは、旅の中で身につけた処世術だ。

昼の民の中でも、とりわけ目を引く艶やかな蜂蜜色の髪。その髪を結い上げた美しい旅人が愛想良く笑えば、大抵の者は警戒を解き、親身になって旅の手助けをしてくれる。今回のように立ち寄った店や宿でおまけしてもらえることも珍しくない。

まあ、逆に招かれざる客を呼び寄せてしまうことも多いのだが。

果物屋の主人から受け取った二つのオレンジのうち、一つを鞆に仕舞い、もう一つを手で弄びながら、大通りを逸れた裏通りへ入る。そして、顕著になった気配にセフィアは疲れたように溜め息を吐いた。

やっぱり。

どこにでもいるんだよなあ——
命知らずって。

「隠れてないで、出て来たらどうだ？」

内心で溜め息を吐き、背後の物陰に向けて声を投げ掛ける。物陰の後ろの気配が一瞬ざわめいた。気配の主達は気付かれているとは思っていなかったようだ。しばらくして、気配の主達は物陰から姿を現した。

体格の良い筋肉質の大柄な男と、それとは正反対に小柄で痩せた男。そのどちらも、いかにも悪人といった凶悪面を晒していて、セフィアは思わず噴出しそうになった。

「嬢ちゃん、威勢が良いのはいいが、喧嘩をうる相手は選んだほうがいいぜ。その綺麗な顔に傷は付けたくないだろ？」

痩せた男がしゃがれた声で言つて、ククツと喉の奥で笑う。男の物言いもそうだが、男のその笑い方がセフィアの苛立ちを募らせる。

「そうだが、嬢ちゃん。黙って俺たちの言うことを聞けば、悪いようにはしないさ」

続いて筋肉質な男も口を開く。本当に気に障る物言いだ。

嬢ちゃん——ねえ。

どういつもこいつも、観察能力に欠けるつつうか——

所詮は——小者ってこと、か。

「で、結局、あんた達は俺をどうしたい訳？」

男達をわざと挑発するように、手でオレンジを弄びながらセフィアは言葉を紡ぐ。

まあ、少しぐらい遊んでやるか。と、セフィアは考える。

この先、厳しい旅が続く訳だし——

肩慣らし。

肩慣らし。

「口の悪い嬢ちゃんだな。俺たちが優しいうちに、素直に従っておけば良かったものを——」

——嬢ちゃんは痛い目を見ないと、自分の立場が理解出来ないらしい」

読み通り。セフィアの仕草が男達の精神を逆撫でし、男達はカッとなつていきり立った。

男達は、互いに目配せをすると、セフィアとの間を、逃げ道をなくすように詰めて行く。セフィアは、脅える訳でもなく、後退る訳でもなく、オレンジを手に男達の足元に目を向けて立っていた。

「ククツ、強がった割に恐怖で動けもしないのか」

男達の腕がセフィアに伸びる——瞬間、
手にしたオレンジを握り潰し、
大柄な男の顔面目掛け、
投げつけた——

「う、ぐああああああ——」

目に入ったオレンジの汁が殊の外効いたのか、大柄な男は目を押さえ蹲る。その様子を見て、セフィアは鮮やかに笑う。

「誰が、お前達なんかに負けるかってーの、バーカ」

思ったことを素直に口に出せば、懲りない男が殴り掛かってくる。
それを、セフィアは、
ひらり——

綺麗にかわし、男の背後にまわる。
そして。

見事なバランス感覚で足を振り上げると、前方から後方になぎ払うように、回し蹴りを——くらわせた。
腹に鮮やかに入った蹴り。

男はぐへつと呻き声をあげ、地に伏す。男が動かなくなったのを確認し、間を置かず、背後から射した影に、髪を揺らし振り返った。

刹那——

目にしたのは伸びてきた男の手。

先ほどまで目の痛みにとうちまわっていた男が復活したらしい。セフィアは、自分の背に合わせて身を屈めたために低くなった男の肩に手を掛け、それを土台として男を乗り越えるようにして、空中で身をひるがえした。

タンッ！

軽快な音と共に、軽く土埃が舞う中、男の背後に降り立つ。

小回りの効かない大柄な男は、慌てて振り返ろうとしたが遅すぎた。

振り返った拍子に男が見たのは、白く綺麗なセフィアの拳だった。その拳が、男の顔にまっすぐに入り、鼻から血を流し、男は仰向けに――

倒れていった。

「ったく、小者とはいえ、ここまで骨がないとは思わなかったぜ」

「――では、次は、私と御手合わせ願えますかな、神子殿」

続いて降ってきた声。

セフィアは反射的に通りに面する建物の屋上に目をやった。そこには――

この暑い中、真っ黒なマントを頭からすっぽりと被った人影が一つ。声音から辛うじて男性だと判断で出来るものの、正体不明の男の登場に、セフィアはごくりと唾を飲む。

自分の正体を知っているとは――

正体を見破っている時点で、足元に転がる男達とは比べものにならないほどの大物だ。二人の間に緊迫した空気が流れる。

――互いに腹の探り合い。

しばらくの間、どちらも動かず――無言だった。

けれど、その行為に飽きたのか、先に動いたのは乱入者。

乱入者はマントをはためかせ、一気に地上まで降り立った。

日干し煉瓦で作られた二階建ての建物。精々十メートル。低くはないが、高くもない。けれども――。

地に足がつくと同時に膝を曲げ、衝撃を逃がしたのか……。

口で言うのは簡単でも、実際に行うのは難しい。セフィア自信も出来ないことではないだろうが、少しタイミングを間違えれば、逃がし切れなかった衝撃が確実に骨に伝わり、骨折は免れないだろう。それを、男は難なくやってのけたのである。

この男、相当出来る。

近付いた乱入者との距離に警戒を強めつつ、セフィアは尚も相手を観察する。頭からつま先までゆっくりと視線を移動させ――ある物が目に入ってきた。

男の胸元で輝く銀の留め具。

男との距離が近付いたとはいえ、この距離で断定するのは難しいが、どうやら狼を模っているだろうそれをセフィアは知っていた。

銀狼の留め具、それは――

セトの配下である証。

ここは鎌掛けてみますか。そう思い立ちセフィアが口を開く。

「このような昼の領域にまで態々私に何の御用でしょうか、夜の御方」

「フフツ、神子殿は何もかも御見通しのようだ。さしずめ美しき昼の君との逢瀬が待ち遠しく、夜を待たずに参上したとでもお答えしておこうか――無粋な輩に先を越されてしまったようだかね」

男の言葉はすんなりとした肯定。

自分が夜の民であることを認めた男は、未だ足元に付している二人の男を鬱陶しげに見やった。

そんな男の一連の仕草に寒気を感じ、セフィアは声を張り上げる。

「寒気をする物言いは止せ。鳥肌が立つ！」

「おやおや、つれない神子殿だ」

セフィアが睨みつければ、男はその瞳で射抜かれることが至福とばかりに甘い声を発する。

「ふん、何とでも言え！ 俺は生憎同性に愛を語る趣味などないんだよ！ もちろん、愛を囁かれるのもまっぴらごめんだ！」

「私は、美しいものには素直な賛美を送ることにしているのだよ。そう、たとえそれが、君のような——男、であつてもね」

ホルスの神子——彼女、否、彼——セフィアは、男の言葉に鼻で笑った。

「はんつ、セトの配下はどうも変態ばかりらしいな」

「随分な言われようだが、美しい昼の君を独り占め出来た分、出向いた価値はあつたようだ。だが、実に惜しい——私はあなたを殺さなくてはならないのだよ、昼の君」

男はそう言うのと懷から二振りの剣を取り出した。一本は大振りだが、もう一本は小振りだ。男は、その二本を胸の前で交差させるように構える。

セフィアもそれに応じて、護身用の短剣を手に臨戦態勢をとった。だが——

「う、ぐう——」

二人の剣がぶつかり合う以前に、地面からした男の呻き声。

一瞬——

ほんの一瞬。

相手の気が——逸れる。

チャンス！

その隙を見逃さずセフィアは空に向かって叫ぶ。

「ウィン！」

ピイルルルルルル

セフィアの声に応えるように一声鳴き、一直線に急降下してくるのは一羽の隼であった。ウィンという名のその隼は、ホルスの使い魔であり、セフィアの旅のお供なのだ。

男は、呻き声に気を取られていたため反応が遅れ、ウィン鋭い爪と翼が巻き起こす風に視界を遮られた。

「では——私はこれで失礼させていただきます、夜の御方」

途中で逃げ出すようでは決まりは悪かったが、今はそうも言ってもらえない。セフィアは、ウィンに後を任せ、くるりと男に背を向けた。

「ファト殿！」

朝食を終え学校に行く準備を始めていたカイは、階下から聞こえてきた喧騒に部屋の窓から階下を見やった。ちょうど玄関と同じ大通りに面しているカイの部屋からは孤児院の玄関先での遣り取りがはっきりと見える。

「昨夜は皆悪夢を見ているですよ。これはもう——何かの悪い兆候かしと思えませぬ」

「そうですね、事によっちゃあ村が減んじまうかもしれない。うちの隣の占い師のホムラ婆なんて、朝起きるや否や逃げ出す準備を始めたくれえだ」

ファトは、村人達の勢いに少々押され気味だったが、慌てず落ち着いた声で答えた。ファトは、ここで自分が冷静さを欠けば、騒ぎが大きくなるだろうことをよく理解していた。

「私も昨夜の悪夢を見過ごして良いものだとは思っていません。ですが、今はまだ子供たちもいる時刻。後日話し合いの場を設けますから、今日はお引き取りください」

ファトは、ちらつと、カイが顔を出していた窓に視線をやった。カイは、反射的に顔を引っ込めたが、ファトが気づいていたのは明らかだ。その時の目は——子供が首を突っ込むな、と言っていて

カイはそれ以上聞き耳を立てることも出来なくなってしまう。カイは、居心地が悪くなり、裏口からそそくさと学校へ急いだ。

その日の学校はいつも以上に騒がしかった。

孤児院の子供達を含めても、三十人にも満たない子供達の話題はもちろん――

昨夜の悪夢。

皆一様に疲れた顔はしていたが、共通の話題に話は途切れるところを知らない。そんな様子を、悪夢を見ることのなかったカイはぼうつと眺めていた。

「カイ、どうしたんだよ」

一人、話に加わらないカイに気がついたのは、やはりというか――
――ラオだった。

自分案じてくれる友達是有難い。

けれど――

カイは、何でもないと顔を逸らした。

ラオは、まだ何か言いたそうだったが、先生の登場にそれは叶わない。

この時は、ラオは大人しく食い下がった。

だが、午後からの授業・発掘で、遺跡に移動すると、好機とばかりにラオはカイに駆け寄った。

「カイ、待てよ！ 皆から離れてどこ行くんだよ」

肩で息をしながら、ラオがカイの横に並ぶ。走ってきたからか、ラオの声はしゃがれていた。

「昨日掘り起こし損ねたものを掘り出しに行くだけだよ。ラオは行

きたくないって言ってたんだから、
ついてくるなよ！」

カイは、自然と歩調が速まるのを抑えることが出来ない。
けれど、それに懸命について来るラオ。

「昨日のこともあってお前から目を離すなってファトに言われたし。
それに……今日のお前、何か変なんだもん」
「変なのはお前だろ！」

思わず荒げた声にラオは目を見開いた。だがラオは、剥きになる
こともなく、カイの言葉を肯定した。

「確かにそうかもな」
「……………」

カイの足が止まる。

「夢のせいかな——目を離すと、お前がどこか遠くに行ってしまう
うような気がしたんだ……」
「ラオ……」

そういうこと、か——とカイは気付く。
今朝からラオは一人になることを恐れていたんだ。
そう思い出して、カイは舌打ちをする。ラオの女々しい態度に対
する苛立ちではなく、自分自身の考えの無さに対する苛立ちを込め
て。

「ラオ、行くよ！」

カイは、その苛立ちを隠すようにラオの手を取った。

そうして、二人は歩いて行く。すると、先客が二人いた。

一人はカイ達によく知る人物だ。彫りのはっきりした齢四十ほどの精悍な顔。けれどその割には、笑うと笑窪ができて、随分と柔らかい印象を与える。若いころは、随分ともてたであろう彼は――

「ファト！」

カイ達の養い親、その人だった。そして、その隣に立っている一人の男――

「……クロウだ」

と、男は名乗った。

その男は、昨日の旅人。やはり、フードで素顔は窺い知ることができない。

夢のこともあり気まずく感じたカイは、助けを求めるようにファトを見る。

「昨日村に来た旅人さんでね。私は、お前達の様子を見に来たんだが。偶然会ったので、話し込んでいたんだよ。ほら、二人とも、挨拶は？」

「……えーと、カイです。よろしく」

とりあえず。ファトに促されるまま、手を差し出す。

マントの隙間から渋々青白い手が差し出された。

その様を、ラオは横から睨みつけている。カイ以上にこの男に警戒心を持っているのだ。

「ほら、ラオも、挨拶を」

「嫌だね！顔も晒そうとしない奴なんかに……」

「クロウ殿は、病のため、長く日を浴びることができないそうだよ。色々と事情がありなんだ。謝りなさい」

「嫌だ！」

ラオは、唇を尖らせてそっぽを向く。

いつもならファトの言いつけは聞くのに。悪夢の所為で気が立っているのだろうか。

「まったく……」

ファトが溜め息を吐く。

「すみませんね、クロウ殿。いつもはこんなに聞き分けのない子じゃないのですが」

「いいえ。気にしてませんから」

男の物言いは素っ気無い。

「そう言って頂けると有難い。ああ、そうだ。お詫びと言ったらなんですが、発掘に立ち会いませんか？カイは、貴重な発掘品を見つけてるのがとてもうまいですから。びつくりするようないものが見付かるかもしれないよ」

「——貴重な？」

「え！ちよっ、ファト！」

話の流れに、カイは慌てて首を振る。

「あの、そんな期待されるようなものじゃありませんから！」

「おやおや、一人前に謙遜などして……」

と、ファトは苦笑する。

その一部始終を見ていた男は、何を思ったか、頭を下げた。

「ご一緒させて頂きます」

「なあ、カイ、本当によかったのか？」

背後に無言で佇む旅人の男にちらちらと視線をやりながらラオが言う。

「仕方ないだろ。ファトの言い出したことだし、断れないよ」

「そうだけど……」

「ああ、もう、今は気にせず砂を掘る！ 手動かして」

「動かしてるって。でも、もう随分掘ったのに何も出てこないぜ。

ホントにここに何かあるのかよ」

「だって、ここから聞こえてくるんだよ」

「ここらって……正確な位置は？」

「わかんない。聞こえてはくるけど、なんか重たく、くぐもってる感じ。でも、ここらは切り出しの岩ばかりだし、砂地のここしか考えられないだろ？」

「ああ、もう！ そう言われてもなあ」

ラオはやる気をなくしたのか、砂地の上に倒れ込む。その拍子に、スコップが手から抜け、切り出しの岩の一つに当たった。岩の一部

が少し欠ける。
その途端。

「――！」

地を這うように鳴り響いた、重く大きな音。
間をおかず地響きが起こる。

たちこめた砂埃の中、四人は大きな影を目にした。

「ガーディアン」

誰ともともなくもらした呟きは、地響きの音に掻き消される。
地響きを背に砂の中から現れた影の主は、岩の巨兵。

胴は人だが、頭はホルスの象徴・隼を模している。隼特有の鋭い目は赤く光り、砂と同じ色合いの赤茶のボディーがギシギシと鳴る。重みで下半身はまだ砂に沈んだままだが、四人の中で一番背の高いクロウの優に三倍はありそうだ。

「な、なんなんだよ！」

砂埃に目を細め、ラオが言う。

「どうやら、カイ達が探していたものはガーディアンに守られているほど、大事なものらしい。その上、ホルス縁の品のようだ」

ファトは冷静なようだが、目はキラキラしている。

学者の血が騒ぐのかもしれない。

神官本来の任は祭事を司ることなのだが。中には神々と人々の歴史を語り継ぐ学者の任も担っている者がいる。ファトもその一人。どうにも学者気質なのだ。

「砂埃が晴れる前に、手をうたないと、このままでは簡単にやられてしまうぞ」

と、男も割かし冷静だ。

「ねえ、ファト。何かあいつを鎮める手はないの？」

カイは彼の言葉に頷き、ファトを仰ぎ見た。

「そうだなあ。一つの手として、あれの動力を断てばよいと思うのだが……」

「でもこんな状況の中で、どうやってそれを見つけるのさ！」

ラオが動転気味に声を荒げている。

「神官仲間から以前聞いた話によると、あの手のガーディアンは守っている物こそが、動力源となっているらしい」

「それなら——」

思い立ったが否や懸命に意識を集中させる。

地から伝わる振動に、巨兵が近付いてくるのがわかる。背を汗が伝った。

どくどくと鼓動が早くなる。

焦るな。

焦るんじゃない。

自分にならできるのだから。

そう、カイは自身に言い聞かせて。

重く脳裏に響いてくる呼び掛けを聞く。
そして。

すぐ近くに――

捉えた！

そう思ったその瞬間。

ふわりっ。

体が宙に浮いた。

状況を把握する暇もなく浮遊感に身を任せていると、ドーンッと再び砂埃が上がる。

今まで自身が立っていた位置だ。

そこに岩の巨兵の拳が振り下ろされている。

あのままあそこに立っていれば。

そう考えると恐ろしい。間違いなく骨もろとも粉々に潰されていただろう。

そして自分の体をその窮地から救ったのは、覚えのある感触。

あの旅人の腕だった。

マントを翻し、トンツトンツと軽く足をつくだけで他の岩の上を移動し、男は岩の巨兵と間合いを取っていつている。

そして十分な距離をとった頃、男はカイの顔を覗き込んだ。

「怪我は？」

「ありません」

そう答えれば。

「よかったな。しかし戦闘中に、気を逸らすことは命取りにしかないぞ」

と、地に下ろされる。

「でも、あれが守っている物の在り処がわかるかと思って……」

「お前がまず第一に考えるべきは、自らの命を守ることだとわかつ

ているのか？子供が要らぬ気を回したところで、足手まといにしかならないんだぞ」

「お説教なら、後でいくらでも聞きます！だから今は、一言だけ言わせて下さい！」

「何だ？」

「あれが守っている物——動力源は奴の腹の中にあります。だから、くぐもって聞こえてたんです！」

「腹……？」

「はい。あいつの腹の中。ちょうど胸の辺りに……」

行き成りこんなことを言っても信じてもらえないのは百も承知だ。けれど、一々説明している暇などない。

カイは自分たちと同じように、ラオを連れ間合いを取ったファトに向けて叫ぶ。男に反論する隙を与えずに。

「ファトー！ あれの腹！ 腹の中に動力源があるよ！」

「はあ！ 腹の中？ どうやって取り出すんだよ」

カイの言葉に、先に反応したのはラオ。彼は誰よりもカイの力のことを信じている。

それに続いてファトが言う。

「そうか、そういうことか。あれの胴体は先ほどラオがスコップを当てた岩だ。岩が欠け、中身が奪われると思い目覚めたのだろう。けれど、石質は存外脆い。そして、太陽熱で熱くなっているはず。急激に冷やせば、亀裂が入る——」

「どうやって？ 急激に冷やせる量の雨なんて期待できないし。水飲み場はあるけど、その水をここまで運ぶ手段はないよ」

「それについては問題ない。ここらには水飲み場に水を引く地下水路のうちの一つが通っているはずだ。そこの水路のちょうど上まで

あれを誘き寄せれば。あれは自身の拳で地を割り、大量の水を浴びることとなる」

「——では、その囹は私が」

「しかし、旅人であるあなたにお願いするわけには。言い出した以上は私が——」

「ファト殿、人には適材適所があるんです。万が一、あなたにもしものことがあれば、この子達は——それに、村の人達はどうなります?」

「ううむう——」

顎に手を添え、唸るファト。

男の言うことは的を射ている。けれど。神官であるファトは、少しでも良心に逆らうようなことはしたくないのだろう。ファトは、自分が誘ったがために巻き込むかたちになってしまった男に申し訳なさを感じているのである。

その葛藤が理解できたのか、男は言う。

「この一件は、私が探していたものに関係があるかもしれない。だから、今更無関係だとも言えないんですよ。おわかり頂けますか?」

巻き込んでしまった——などと思ってくれるな。

そういう男の意思表示だった。

男の言葉にファトがはつと顔を上げる。

そして、真正面から男の顔を見据えた。男の隣に立っていたカイには、ファトの表情がはつきりと見える。笑っている時の優しいものではない。発掘品と向かい合う時と同じ真剣なものだ。

「わかりました。お願いします、クロウ殿」

「ええ。では、水路の位置をお教え願いますか」

「ちょうど、あれが立っている位置から右手前三十メートルのここ

るに……東西にまっすぐ走っています。できるだけ、近くでバックアップしますが、無茶はなさらないで下さい……って、話はまだ……」

水路の位置を確認すると、後の時間が惜しいとばかりに男が駆け出す。ファトが慌てて後を追おうとするが、年齢の差が追いつけない。

男は岩の巨兵の前に躍り出る。

「お相手願おうか」

そう言つて、男はマントの下から布に包まれたメートルほどの長い包みを取り出した。今まで気付かなかったがどうやら、彼の得物らしい。

布がざつと外され出てきたのは、抜き身の剣。

オオオオオオオオオオ——

剣で照り返した太陽光を浴び、巨兵が咆哮をあげる。同時に、その咆哮に呼応して地が揺れた。カイはその揺れによるめいて、ほんの数秒目を放した隙に彼らの攻防は始まっている。

斜め後ろに男が飛ぶ。

目の前で風が起こり、砂を巻き上げて、

ドーンッ！

ドーンッ！

ドーンッ！

規則正しく上がる音。

右、左、右——と、巨兵の両の拳が規則正しく地を打つたのだ。

男は、自らの得物を構えたまま、その攻撃にあわせて少しずつ後退する。

けれど。

「――！」

砂に足をとられ、男の反応が遅れた。

男の動きから目を話すができなかったカイは咄嗟に声を張り上げる。

「こつちだ！」

オオオオオオオオオオ――

拳が地を打つ音の変わりにもう一度咆哮。

巨兵の腕が寸でのところで止まった。

そして、男に向いていたはずの巨兵の意識がカイに向けられる。

そのことを確認し、カイはファトが示した地点に向けて駆け出す。

「あ、カイ！」

「こら！」

ラオとファトが同時に静止の声をあげるが、ここで止まるわけにはいかない。

ただ一点を目指して走る。

そして。

「来い！」

目的地。

勢いを殺すことなく駆け抜けながら、くるりつと振り向く。

刹那。

目の前に飛び込んでくる影。

振り下ろされる拳。

それを間一髪で避けると。

「――！」

地が裂ける。そして噴き出す水飛沫。

水飛沫を全身にうけカイは巨兵を見上げる。

そして、同じようにずぶ濡れになった巨兵の体に――ガギンツ

！――耳につくほど大きな音と共に亀裂が走った。

止むことなく胸に噴きつける水。その水圧を利用してみるみるその亀裂が大きくなり、ついに、巨兵の腹から何かが落ちてくる。

「おっと！」

カイは、危なげなくそれをキャッチした。

落ちてきたのは三十センチ四方の箱。見たところ鍵穴はない。

箱の蓋には、見事な彫刻で彫られた太陽。そして、その太陽を縁取るように真紅のルビーがはめ込まれている。また箱の側面には、ホルス神の象徴――隼が、目にダイヤモンドの光を宿し、彫られていた。

「やったぜ！」

近くまで駆けてきていたラオが歓声をあげる。

だが、喜びは束の間だった。

岩の巨兵の体が倒れてくる。

動力源を失ったため、実質的な攻撃ではない。けれど、その分脆くなった体を支えきれなくなったのだ。

そして、巨兵のすぐ下にいたカイは、はつきりとその様を目にした。

このままじゃ、あの体の下敷きになる。そう思ったが、体が動か

ない。

カイは目を見開いたまま、どうすることもできない。
と、そこへ――

走ったのは黒い影――旅人の男が駆け込んできた。

カイの体突き飛ばし、男もその場から飛び退く。

けれど、飛び退いた起動の先に、巨兵が斜線を描いた。

「危ない！」

叫ぶのが早い――

けれど、空中で体の向きを変えることは俟たない。

風に巻き上げられた砂の様に、男の体が吹き飛ばされる。

「あ――」

目で追った先。男が落ちた地点で、砂埃が上がった。

カイは手にした箱を、抱き起こしてくれたラオに押し付け走り出す。

背後では、ガラガラと音をたて岩の巨兵が崩れていく。脆く崩れた岩の破片が、雨のように頬を打った。鋭く尖った部分で、いくつも切り傷ができたが気にしている暇などない。

「大丈夫ですか！」

「ぐう、ぬうう」

収まりきらない砂埃に目を細め叫べば、呻き声が返る。

その呻き声に、目に涙が浮かんできた。今になって足がガクガク震えだして、立っているのも俟たない。

「退いていなさい」

背後から肩に手を掛けられて、ぐいっとその場を退けさせられる。そのままバランスを崩して、砂の上に尻餅をつく。

「ファト、クロウさんは？」

恐る恐る。カイは男に処置を施すファトの背に向けて問う。

「砂がクッションになったのだろう。骨折はないようだ。けれど、腕に走った亀裂部分が掠つたらしい。脇腹をやられている」

と、ファトはカイに答えると、今度はクロウに声を掛けた。

「応急処置をします。マントを脱がしますよ」

あれだけのアクションをしてもはずれることのなかったフードが、ファトの手によってはずされる。今まで、まじまじと見る機会がなかった男の素顔。夢で見た青白い肌は、微妙に朱がさしている。額には汗が浮かんでいて、そのせいで長めの前髪が額に張り付き、男の目元は確認できなかった。けれど、どうやら、痛みの為に眉間に皺が寄り、目は堅く閉ざされているようだ。

「こりゃ驚いた。クロウ殿が夜の民だったとは」

男の闇夜のような漆黒の髪を見て、ファトが呟く。

「こいつ、やっぱりとんでもないこと隠してやがった」

後から箱を手にくっくり近付いてきたラオが、ちょうどファトの呟きを聞き、そうもらす。

「こら、ラオ！ カイを庇ってくれたクロウ殿に、その言い方はないだろう」

「……………いいんです。隠して…いた、の……………は、事実です、から……………」

薄っすらと男が目を開けた。そしてゆっくりと首を動かし、顔をカイとラオに向ける。

と。

ほんの一瞬。

痛みに焦点のあっていなかった男の目が、はつきりとある一点を捉えた。

それはきつと、地に横たわっている男と目線の近いカイにだからこそわかったことだ。男の目に留まったのは、ラオが持ってきた先ほどの箱。カイは男と箱を交互に見やる。すると、男の唇が微かに言葉を嚙むように動いた。だが、それが傷に響いたのか、言葉が音になることはない。

「は、ぐ、うう——」

「ほら、じつとして……………」

ファトが男のマントの裾を破り、傷口に当てる。砂まみれだが、止血するためには無いよりましだ。そして応急処置を終え、ファトが立ち上がる。

「ラオは医者を呼んできなさい。カイはクロウ殿の付き添いを。私はこの地響きで騒ぎになっているでしょうから、村人達を宥めてきます。ですが、二人とも、変に村人を刺激しないためにも、彼が夜の民だと安易に口にはいけませんよ」

ラオは、その指示を聞き、真っ先に駆け出す。

ファトも急ぎ足で後続く。途中でラオが手にしていたあの箱を受け取っているのが見えた。

あの箱が男の探していたもののなか。その確認を取らなくてはならないのだが。まあ仮に、ここに置いていったとしても、男がこんな状態な以上、見せることも憚らないし。

後で見せればいいだろう。と、カイはそう思うことにする。

そしてまったくもって二人の後姿が見えなくなってしまうと、気まぐずい空気が流れた。男は目を閉じ、額に珠のような汗を浮かべている。息は荒くなる一方だ。それに、血の臭いに誘われて闇の森から、怪物が現れるのではないかと気が気でない。

カイはその不安を振り払うように、男に声を掛けた。

「大丈夫。すぐにラオが医者を呼んでくれますから」

「……………」

カイの呼び掛けに、男はうわ言のように呟く。

「…太陽……の……瞳……は」

砂埃を吸ったためか、はたまた怪我のせいかわ、男の声は掠れている。けれど確かに聞き取れたその言葉。

聞いてはいけないような気がした。

カイはそう感じて立ち上がる。

「俺、水汲んできます」

先ほど地下水路一つを壊してしまったが、もう一つの地下水路は活きているから水は絶え間なく供給されているはずだ。

このままじつとしていることはどうもカイにはできそうになかつ

た。

声に男の臉が答えるように震えたのを確認して、カイは水飲み場へと急ぐ。

けれど水を汲み、戻ってきた時。

「クロウ——さん？」

水飲み場に備え付けられていたおわんに汲んできた水を、カイは思わず取りこぼした。

男の姿はどこにもない。

砂の上に僅かな血の跡だけを残して、男の姿は忽然と消え去っていた。

「ファト殿、悪夢の原因は、きっとあの夜の民の野郎ですよ！」
「そうです、ファト、奴を捕まえて締め上げるべきだ！」

男が姿を消したことを伝えに、遺跡から駆け戻ったカイは、孤児院の玄関先で繰り広げられるやり取りに目を丸くした。そして物陰から様子を窺うラオを見付け、問い掛ける。

「ラオ、お前が村人に話したのか？」

あの場に居たのは、村人達の話に出ている旅人の男を除けば、自分とファトとラオだけだった。

自分はもちろん彼の正体を明かすようなことはしていない。そしてあれだけ念を押していた以上、ファトも違うだろう。となれば、村人に話したのは、ラオしか考えられない。

「話したよ。それに、俺も村人達とは同意見だ」

「何で、そんな……」

「だってあいつ、初めて会った時から怪しかったじゃないか」

カイは口を閉じるしかない。

怪しい、ということは否定できない。
けれど。

悪夢の件に関して、カイにはあの旅人を疑うことは出来なかった。それは、ちょっとした感なのだけれど、確信。
だって――

そんなことをするつもりの人が、助けてなどはくれないうから……。

「皆、落ち着きなさい。まだ、あの旅人が原因だと決まった訳ではないのだから」

ファトが一人で、詰め寄る村人を落ち着かせようとしていたが、あまり効果はない。

悪夢のせいであまり眠れず、村人達の溜まっていた疲れが、ここにきて爆発したのだろう。押さえの利かない村人達に、ファトは溜め息を吐く。

「仕方ありませんね。村の皆に伝令を。但し、手荒なことはしないで下さいね。本人からお話を窺えば、皆さん納得してくださるでしょうから」

ファトは念を押すように口調を強めたが、ファトの許しがありたことに気を良くした村人達に、後半の忠告は聞こえなかったらしい。

「ファト殿のお許しが出たぞ！あの男をひっ捕らえるんだ！」

と、誰ともともなく声をあげれば、それが大きな合唱となって、村人達は揃って大通りを歩き出した。

カイはその様を見て唇を噛む。

男の身が案じられた。

そしてその不安は、日が沈んでも拭いきれなかった。

カイは眠れずにいた。

昨夜のような恐怖のせいではない。他ならぬあの男の身が心配で目を瞑り、浮かんでくるのは今日一日の出来事。

皆が見たという悪夢。夜の民だという旅人。

綺麗な発掘品。

そして、男の言葉。

「太陽……の……瞳……は」

男の声が思い起こされる。
と、その時。

「――！」

鼻をついた薬草の香りに回想は途切れた。

カイは閉じていた目を開け、香りの正体を確かめようと身を起こし掛けた。

が。

伸びてきた手に、その体はベットに戻る。

カイは驚きに目を瞬かせた。

侵入者は――

件の旅人だった。

昼間フードで隠されていた顔は、日が沈んだからか惜しげもなく晒されている。輪郭は漆黒の髪に縁取られ、黒曜石を思わせる丸い瞳には、強い光が宿っていて、

ああ、無事だったんだ。

と、カイは思った。

「太陽の瞳は……お前が昼間手にした箱はどこへやった？」

男が、押さえ込んだカイの耳元で問う。カイは抵抗などする気もなく、体の力を抜くと静かに腕を持ち上げた。

そして、まっすぐに指したのは東。

「神殿か……」

男がその意味を察して呟く。カイは、肯定するようにこくりと頷く。それを見て、納得したのか、男はゆっくりと体を離す。だが、離れていった男の手を、

「待って！」

カイは思わず掴んでいた。

「何のつもりだ」

目尻を吊り上げ、低い声で男は唸った。カイはビクンツと肩を震わせたが、どうにか言葉を搾り出す。

「ホルス神の神殿にセトの加護を受けた夜の民は入れないよ」

「私は、セトの加護を受けた覚えはない！」

カイの言葉に男は眉間に皺を寄せた。明らかな嫌悪——男は、心底セトを嫌っているようだ。

どうしてなのだろう？

それはわからない。

けれどこの人は、やはり悪い人ではないのだ。

と、カイは思った。

男の言葉がカイを安心させた。

だからだったのかもしれない。まあ、そうとしかいいようがないのだが——次に口について出た言葉は、用意していたものとは違っていた。

「でも、夜の民であることに変わりはないでしょ？ どうしてもっ

て言うのなら俺も行く！ 神殿内は宝物庫まで仕掛けも多いし……」

自分の口をついて出た言葉に、カイ自身驚くしかない。だけれど、その言葉を口にしたことに、不思議と後悔はなかった。

「お前が……、か」

カイの言葉に男は驚きを隠そうともしない。男は、自分に手を貸すというカイの言葉を信じていいものか図りかねているのだ。

「お前は、自分の言った言葉の意味がわかっているのか？」

「わかっています」

「では、なぜ——」

昨日、今日、あなたを見てきた。

だから、俺は——

「大人たちのように夜の民だからといって敵視するつもりはない！ 何より、あなたは俺を何度も助けてくれた。そんなあなたが、これほどまでしてあの箱を手に入れようとするのは何か理由があるんでしょう？俺は、その理由は知らないけど、今まで助けてくれたお礼ぐらいはしたいんだ」

男の表情が——和らいだ。

「お前は……やはり、あいつに似ているな」

「え？」

思わず疑問符を口にする。似ているって、誰に？

「いや、何でもない。それより、本当にいいんだな」

男は慌てて取り繕うと、カイに向き直った。カイの提案を認めてくれたのだ。カイは、男に力強く頷いてみせると、

「さあ、行こう」

ジャケットを羽織り、男に手を差し出した。男は素直にその手をとる。

男の無事とこれから始まる小さな冒険に、カイは胸を弾ませた。だが。

ヴオオオオーン。

突然響いた鐘の音に、男の動きがぴたりと止まる。

村の中には時計台も鐘楼もないのに、とカイも首を傾げた。すると、男の手に力が込められたのをカイは感じ取った。

「ねえ、どうしたの？」

「しっ！ 黙っている」

ヴオオオオーン。

もう一度。

鐘の音は遠いようで近く、近いようで遠い。

不思議な印象。

不可思議な錯綜。

カイは、何が起こったのか把握出来ず、ただ言われるまま口を閉じた。

すると。

がちやりっ——と鐘の音だけが響く中、その音は一種異様な響きを持っていた。それはラオの部屋から聞こえ、ついで、ギイツとドアが開く音が聞こえる。

カイは指示を仰ぐと、黙って男を見上げる。
しかし。

当然その音に気付いていると思っていた男の視線は、窓の外へと向いていた。

「悪夢が生み出す負の感情が、顕現してしまったのか……」

男は憎たらしげに呟き、唇を噛む。

カイは男の視線を追った。

そこには真夜中だというのに、大通りに集まりつつある村人達の姿があつた。

一方――

セトの配下の襲撃からうまく難を逃れたセフィアは、《女神の涙》の町の南に位置するホルスを祀る神殿へと逃げ込んでいた。

セトの加護を受けるセトの配下達は、ホルスの加護下にある神殿内部までは入り込むことは出来ない。よって、神殿は態勢を立て直すには最適な場所なのである。

なにより、中央――ウジャト神殿の神官長の紹介状を持った者を足蹴にする者などいるはずもない。

ありがとう、おじさん。恩にきる！

セフィアは現金なことに、こういう時だけ、心の中で神官長に礼

を述べた。

「ところで、セフィア殿、《始まりの誓い》の村までどのようなルートをお考えか」

今夜はこの神殿に世話になることを決めたセフィアは、夕食の席、この神殿の責任者たる男の言葉に、料理から視線を上げる。そして優雅に果実酒を口に運ぶ男を視界に納めた。

《女神の涙》の町は大きな町だ。東西南北にのびる街道の交差点に位置し、物資の行き来の拠点として発達してきたのである。純粹に規模だけでいうと、ウジャト神殿を有する——中央、について勝るとも劣らない。まして、商会については、いうまでもない。町の名と同じ名を冠する《女神の涙》商会は、歴史格式とも国一番と言って良い。そんな町の神殿の長たる目の前の男——ロイはこの町の出身なのだろう。商人のように計算高く、先の先まで読もうとする態度がちらほらと窺えた。

喰えない男だ——セフィアはそう思っている。

「《恵みの雨》街道から水晶谷の方に抜けて行こうと思っています」

本来、急ぐ旅故、最短ルート——《恵みの雨》街道をまっすぐ北に進んで行くつもりだったが、《恵みの雨》街道は人の行き来が激しすぎる。

セトの配下にいつ襲撃されるとも知れない今、無関係な民を巻き込みたくはなかった。そうはいったものの、セフィアの言葉を聞きロイが浮かべた表情は、困り顔だった。

「揚げ足を取るようで申し訳ないのだが、水晶谷の方で、ほんの二日前に土砂崩れがあつてね。今、現在、全力で復旧作業中ですが、少なくともあと一ヶ月は通行止めですよ」

「なっ——！」

先手を打たれていたのか……。
となると、こちらの取るべき道は……。

考えれば、
考えるほど、
眉間に皺が寄る。

「ふふふ、美しい顔をそんなに歪めるものではありませんよ」

一人、その表情の変化を見ていたロイは、笑う。
面白がっている？

自分がこれだけ苦労しているというのに——。
けれど、ロイが笑った理由は違う。
違っていたのだ。

その笑いは——自分だけが知っている秘密を明かす時の、それ。
バサリッ。

一枚の紙がテーブルの上に広げられた。自然と視線がその紙に吸い寄せられる。日に焼け黄ばんだその紙は——地図だった。

03 1 神子と裏切り者

「この地図は？」

テーブルの上に広げられた地図を見て、セフィアはロイに向かって問い掛けた。

「この街に伝わる地図ですよ。一般に知られていない抜け道も多数記されているね」

「抜け道——」

セフィアは、純粋に驚いた。今まで数々の旅を経験してきたが、そんな便利な地図があるなんて思ってもみなかったのである。そのセフィア驚き様を見て、ロイは悪戯が成功した子供のように笑顔をつくり、地図の二画を指差す。

「ここが我々のいる商業都市《女神の涙》の町。そして、こちらが——」

「目的地、《始まりの誓い》という名を冠する村——ですね」

「ああ、そうだ。目聡いね」

「ええ、旅慣れてますから。位置関係でわかります」

ロイに笑顔で答えて、もう一度地図に目を落とす。

《女神の涙》の町には赤い点が、《始まりの誓い》の村にはオレンジの点が打たれ、その隣の隣に古代文字で街の名前が記されている。その他にもいくつも赤とオレンジの点が打たれていて、その点を繋

ぐように青い線と緑の線が張り巡らされていた。

ロイは、《女神の涙》の町と《始まりの誓い》の村の位置を確認させた後、今度はその二点を繋ぐ、青い線と緑の線を一本ずつ指し示した。

「青い線は、一般によく知られる街道です。《女神の涙》の町から北へまっすぐのび

《風の軌跡》の町を経由して《始まりの誓い》の村に向かうのが、一般的なルート。そして、こちらの緑の線が——いわば抜け道、この町の商人が利用する道ですよ」

その緑の線は、北西にのび、《薄明かり》の町を経由して《始まりの誓い》の村へと伸びていた。

「こんな道があつたなんて……」

この道なら、セトの部下の待ち伏せもなく、直線距離的には《風の軌跡》の町を経由するよりずっといい。

「お役に立てましたか？」

「ああ、感謝する、ロイ殿」

湯浴みをしたため、結うことなく下ろされていた髪が、さらりと落ちてくることも構わずセフィアは頭を下げる。ロイは、クスツと笑い、落ち着いた様子セフィアの髪を一房手に取り、そつと口付けを落とした。

「いいえ、美しきホルスの神子様への贈り物が気に入って頂けたのならなによりだ。だが、お礼を言われるのはまだ早いですよ。我々はあなたにもう一つ、贈り物を用意したのですから」

自分と十ほどこしか歳の変わらない、歳若いこの神殿の主には、そ

の仕草はとても似合っていたが、神殿のそれなりの地位に就く者が、セフィアの性別を知らぬはずがない。セフィアは、昼間応戦した人物を思い出し、ぶるっと身震いをして、慌ててそれを結い上げた。

「おや、もったいない」

ロイがあげたのはおどけた声。本心からそうは思っていないのだろう。

からかっていただけ……、か。

本気で安堵したことは胸の内にしまっておくことにする。

「まったく、からかうのは止めていただけませんか、ロイ殿」

セフィア呆れたように溜め息を吐いたが、ロイは笑うだけで、あまり効果はない。

だが、本当に不本意ながらも、この男にも苦手なものがあったらしい。

「ロイ、戯れがすぎるぞ。お前の軽率な行動が《女神の涙》の町の品位を下げることになったら、どう責任を取るつもりだ」

凜。

そう表するに相応しい。否、そう表する他に表しようもない、生気に溢れ、活力に満ちた、良く通る女性の声が響いた。

「ティファ、来ていたのか……」

ロイの声に続いて目を向ける。そこには――。

綿だろつか、肌触りの良さそうなシャツに、刺繍の施されたジャケット――その服装はどう見ても男物なのだが――に身を包み、

声からイメージするに相応しい女性が立っていた。

日に焼けた茶色の髪を邪魔にならない頭の高い位置に結い上げ、手に砂除けのマントを手にしていることから、その出で立ちは旅装といっても過言ではない。

「来ていたのかも、何も、お前が呼びつけたのだろ」

ティファと呼ばれた女性は、ロイの言葉にふんつと鼻を鳴らした。

「私は確かに君たちの商会に協力を申し込んだが、君を遣^{よこ}せとは一言も言わなかったと記憶しているが……」

「だが、私を遣^{よこ}すなとも言わなかっただろう？ あの商会の中でお前と対等に話が出るのは、私ぐらいだからな。私が態々出向いてきてやったんじゃないか」

ティファの物言いは何とも不遜なもののだが、ロイ相手にはこのくらい言わない効果はないらしい。

現に、先ほどまでの笑顔はどこへやら、ロイが浮かべているのはなんというか……、複雑な表情。その表情を言葉で言い表すのは難しいが、強いているなら——渋顔——だった。

「まあ、兎も角だ。役者が揃ったことだし、話を続けようではないか、セフィア殿」

来てしまったものは仕方がない。と、いった感じで、ティファにちらつと視線をやりはしたものの、ロイはセフィアに向き直った。そんなロイの対応に慣れているのか、ティファは気にせずテーブルに歩み寄り、「《女神の涙》商会のティファだ。よろしくな、神子殿」と軽く挨拶をすると、まるでそこが定位置でもあるかのようには戸惑いもせず、テーブルの一边に腰を下ろした。

ロイは役者が揃ったといったが、どうやら商人らしきこの女性が

話の鍵を握っているらしい。セフィアは黙って二人のやり取りが始まるのを待った。

だが……………、

過ぎたのは、無言の時。

ロイの部下が皆に入れていったお茶は、もうすっかり冷めてしまっている。それでも、二人は時々相手の様子を窺うように視線を上げるだけ。顔は始終俯き加減なので、セフィアは痺れを切らし、声をあげそうになった。しかし声をあげようと息を吸ったその時、カチヤリと食器がぶつかる音がして、ティファが冷めたお茶に口をつけた。次いで、口を開く――

「ロイ、黙っている暇があるなら、こんな時間に呼び出した理由を御聞きしたいのだが、な」

「《女神の涙》商会のティファともあるう者が、その理由もおわかりにならないとは…………。商会の情報収集能力も高が知れるな」

「ほう、協力を求めてきたのは神殿側だというのに、随分な言い草ではないか。私達はお前達の協力要請を蹴ることも出来るのだぞ」

「ふん、よく言う。そのつもりなら、最初からこの場に現れはしなかったらうに」

口を開くや否や、始まったのは言葉の応酬。先ほどまでの沈黙が嘘であるかのように、言葉が――

跳ねる。跳ねる。跳ねる。

飛ぶ。飛ぶ。飛ぶ。

言葉を交わす度、二人の間でぶつかり合う火花が見える。

この二人、犬猿の仲もいいとこだ。

と、セフィアは思った。の、だけれど――

「まーたやってるよ、あの御二方。しかし、久しぶりに会う度に夫婦喧嘩を始めるくらいなら、寂しかったと素直に口にすればいいのに」

と、控えていた神官がぼろりともらした。

なんだろう——この敗北感。

結局。

いや、最初からまるつきり、

夫婦喧嘩は犬も食わない——だった、とは……。

けれどもそう認識してしまうと、もう痴話喧嘩にしか見えなくて、セフィアはその喧嘩の終焉をひたすら待つことにした。

それから数刻、加熱した夫婦喧嘩は一応終焉を迎えたらしい。肩で息をする二人に、先ほどの呟きをもらした神官が慣れた手つきで湯冷ましを渡している。そのカップがペアのものだと気付いたセフィアは砂吐きものである。

まあ、それは置いとくとして——その後の話はスムーズに進んだ。一通り喧嘩をしたことで、ロイとティファのやり取りが柔らかくなったことが理由としては大きい。

「では、神子殿をうちの商会の商隊に加えて、『薄明かり』の町までお連れすればよいのだな」

「ああ、出来るだけ早いうちに頼む」

「それなら、今夜にでも商隊が一つ出立するが——どうする、神子殿」

「今夜……ですか？夜に出歩いて大丈夫なのでしょうが」

出来れば急ぎたいが、本来日が沈むと共に眠りに就く昼の民が、夜に旅をするなど考えたことがなかった。そのため、セフィアには僅かな戸惑いが生じる。けれど、夜の旅というものは、ティファの言動から判断するに、『女神の涙』商会にとっては、割と一般的なことのようである。

「セトのことを考えているのかな？」

口を挟むロイ。考え事を見透かされている。

その言葉に反応して、すかさず、ティファが言葉を補った。

「ああ、セトか……。それなら、大丈夫さ。夜中の移動には必ずこの神殿の神官が一人同行する決まりだ。そう簡単には手出しできないさ」

ああ、それか。

セフィアは妙なところで納得した。

神官は神職といえど、決して結婚を許されていないわけではない。それでも、独身の者が多いのは、一重に出会いの場が少ないためだ。おそらく、ロイは同行した商隊でティファとであつたのだろう。

「それなら——ああ、でも、急に一人、同行者が増えて大丈夫なんですか」

「それも心配ないさ。今回の商隊の責任者は私だ。文句を言う奴などいない。いや、言わせない！」

拳を握り締め断言するティファ。なんとも頼もしい。

「では、ご迷惑でしょうが、お言葉に甘えさせて頂くことにします」

深々と頭を下げ、セフィアの商隊への同行が決定された。

ガシャンッ！

と、一際大きな音をたて、荷馬車が止まる。すると、ホロの隙間から光が射し、顔を覗かせたのはティファだった。

「神子殿、起きているか？」

「おはようございます。ちょうど、ついさっき目覚めたところです」

言いながら、セフィアは掻き揚げたため乱れた髪を手櫛で直し、さつと結び上げる。

ティファはその手が髪から離れるのを見計らって、茶色の紙袋と水筒を手渡した。

「朝ごはんだ。休憩をとったら、またすぐに出発するが。もう二刻もすれば《薄明かり》の町に到着する。準備を整えておくといい」

紙袋の中を覗けば、ライ麦パンのサンドイッチとオレンジが一つずつ入っていた。ホロから覗く御者台では、御者の男が同じように紙袋から取り出したサンドイッチに食いついている。働き盛りの成人男性には少なすぎる量らしく、サンドイッチはものの数秒で男の腹へとおさまっていった。

そんな様子を起き抜けの頭でぼうつと見ていたセフィアの隣で、ティファが苦笑した。

「ははは、ご飯といっても町に着くまでの繋ぎだからね。町に着いたら何か温かいものでも食べるといい。ちょうど、市も立つことだし」

そう言って自分も綺麗に皮を剥いたオレンジを腹に収める。そして、商隊に指示を出すべく駆けていった。

セフィア達商隊の一員が《薄明かり》の町に到着したのは、ティファの言葉通り、二刻ほど後のことである。積荷を依頼主に届け、市の露店で朝食をとるという商隊の面々に礼を述べ、セフィアは商

隊を離れた。その時ティファが依頼主と次の仕事の商談をしていて、ティファに直接礼を述べられなかったことは残念だったが、いずれまた会う機会もあるだろうと思ひ歩調を速める。が――、
どさりっ。

突然の衝撃。

それと共に目にしたのは、朝日を思わせる金色の髪を振り乱し、脇道から飛び出してきた少年の姿。

その少年に行く手を阻まれ、セフィアはよろめいた。

少年の方は、反動を殺しきれずに地面に倒れこんでいる。文句を言いたいのはやまやまだったが、それより先に少年を助け起こそうと、セフィアは手を差し伸べる。

「大丈夫か？」

無論、少年はその手を取り、謝罪と礼を述べるものだとばかり思っていた。

けれど少年は目を瞬かせる。

ついで――

「助けて！」

少年の口について出たのは、お礼でも謝罪でもなく、切実に助けを求めるそれだった。

助け起こすために差し出したはずの手に、縋るように力を込める少年に、セフィアは瞠目し、目を瞬かせた。その間も少年は、セフィアの腕を掴む手に力を込め、助けを求め続けている。

「助けて！ 早く！ 早くしないと、クロウが！」

少年の慌てようは只事ではない。

けれど、気が動転しているのであろう少年は、状況説明も俚ならず、助けて、助けてと連呼するばかりだ。

どうしたものか――

考えを巡らせ、セフィアは今朝受け取った水筒のことを思い出した。

「確か、鞆の中にしまったままだったよな……」

ぼつり、眩きをもらす。

そして、腕に少年を貼り付けたまま器用に体を回し、鞆から水筒を取り出すセフィア。

と、次の瞬間――

こともあるうちに、腕に縋りつく少年の頭から、その中の水を、ぶっつけた――。

冷たい――

と、感じてカイははっと我に返る。

その冷たさの正体を探るように顔に手をやれば、顔からぽたりと水滴が落ちてきた。

「少しは落ち着いたか？」

目の前にいたのは、水筒を手に持ち、神官のように白い衣装に身を包んだ美しい女性。その姿が、なぜか自分を助けてくれたときの

クロウの姿に重なって、カイの目にはぶわっと涙が込み上げてきた。

「悪いっ！ 冷たかったよな」

突然涙を零し始めたことに驚愕したのか、目の前の女はおどおどし始めたが、カイは首を横に振ってそれを否定した。そして、ごしごしと薄汚れてしまった服の裾で涙を拭う。

泣いている暇などない。

クロウを助けなければならないのだ。

と、しっかりした意思を持つと、涙でぼやけていた視界の焦点が定まってきて、カイは改めて女性に向き直った。

「あつちで、あつちで俺の連れが黒いマントの奴に襲われて——でも、俺この町始めてで、どこに助けを求めていいかもわからなくて……。お、お願いです！ どうか、助けてください！」

と、カイは言う。

一拍。女は何事か考えを巡らせ、

「おい！ その黒マントの野郎、狼を模した銀細工の留め具をつけてなかったか！」

と、カイに詰め寄った。

「えーと……」

記憶を辿り……。

「たぶん、胸元に……」

と、呟くカイ。その呟きを聞き、女の表情が豹変した。

「どこだ！ 案内しろ！」

「え？」

女にしては口調が荒々しいことも気に掛けず、カイは疑問符を口にする。

確かに、助けは求めた。けれど、それは、精悍な男達の助けを連れてきてもらおうと思ったからだ。だが、どうだろう。

これではまるでこの女が、クロウを助け出す気にいるようにしか聞こえない。小柄で、細身なこの女が、クロウが苦戦を強いられている黒マントを倒せるようにはとても見えなかった。

そのカイの考えが予想出来たのか、女は不機嫌そうに眉間に皺を寄せ、言い放った――

「俺が助けてやる！だから、案内しろ、って言ってんだよ！」

「裏切りものもこれでおしまい、だな。最期に言い残すことはあるか？『暁』の野郎に伝言ぐらいはしてやるぜ？」

目の前の男にみすみす殺されてやる気はなかったが、背後は壁。逃げ場を失ったクロウは剣を握る手に力を込める。

日頃の行いが悪かったからだろうか。

クロウは太陽の瞳を盗み出そうとまで考えた自分の行動を思い起こす。

後悔なら——たくさんある。

家族。

そう、

兄のこと。

大切なあの子のこと。

それから、

自分を信じてくれたカイのこと。

皆、どうか元気で。

心の中で呟いてクロウは目を瞑った。

ビュッブオオン——

男の持つ剣が有らん限りの力で振り下ろされ、空を切り風が渦巻く音が聞こえる。

ああ、何も出来ないまま自分は死ぬのだ。

と、クロウは思った。

けれど、

ギンッ！

「うぬう……う」

顔前で起こった風と金属が弾き飛ぶ音。続いて響く呻き声。突然逸れた風の軌道に、クロウはゆっくりと目を開けた。

コトンツと目の前にナイフが落ちる。

「クロウ！ 間に合ってよかった！」

光に霞む目で捉えた姿はぼやけていた。しかし、声だけは確かに届いた。

まだ声変わりを終えていない少年特有のよく通る声——クロウが逃がした少年の声が。

「カイ？ なぜ逃げなかった！」

駆け寄ってきた少年に、クロウは一種の眩暈を覚え呟いた。

あのまま逃げていれば、これ以上巻き込まれることはなかったのに。

なぜ逃げなかった。

なぜ自分を助けに来た。

なぜ——

「それはあんたの自己満足だろ」

クロウの問い掛けに答えたのはカイの隣に立つ女性。否、女性というにはまだ幼さの残る彼女は、少女と表現したほうが相応しい。そしてその幼さは時に残酷で、少女は言葉を飾ろうとはしなかった。

「あんたはこの子を逃がしたかったのかもしれないが、この子はあんたを助けることを選んだ。この子が自分の意思に従って行った行為を、あんたに咎める筋合いはない。そして何より、今はそれを責める時ではないだろう——」

すうっと少女の目が細められ、乱入者の登場に間合いを取るように離れた黒マントの男に向けられた。

「セトの配下がこのようなところで何をしている」

「それは俺が知りたいね、ホルスの神子。俺はその裏切り者を狩りに来たまで。それなのに、裏切り者を助けに駆けつけたのは、『女神の涙』の町で『戦慄』に足止めされてるはずの神子殿ときたもんだ」

ホルスの神子だって？

じゃあ彼女は——

いや、彼は——

二人のやり取りにクロウは目を見開いた。
けれど、驚きを隠せないクロウを置き去りにして会話は続く。

「『戦慄』？ ああ！ あの変態のことか。あいつなら、まだ『女神の涙』の町で俺を探してるんじゃないか？」

「ふん、あの馬鹿はまんまと撒かれちまったってことか。じゃあ、ここで俺が尻拭いしなきゃならないって訳だな。めんどくせえなあ、おい」

ぼりぼりと頭をかき男は剣を構え直した。それに応じて神子もすつと背筋を伸ばし、短剣を胸の前で構える。

見たこともない独特の構えだ、とクロウは思った。

「こちらまで来て、足止めをくらう訳にはいかなからな。本気で行かせて貰う！」

神子が高らかに宣言して地を蹴った。クロウに寄り添うようにして一部始終を見ていたカイが、目尻に涙を浮かべ、服を掴む手に力を込める。

男と神子との体格差は歴然としていた。体格差イコール強さの差という訳ではないが、体格が違えばもちろん^{パワー}力も違ってくる。

大人であるクロウから見ても不利だと思えるこの戦いを、子供であるカイが神子の負けを予測しないはずがなかった。だから、クロウは心配そうなカイをほおっておくことが出来ず、優しく言葉を掛けた。

「大丈夫だ、心配するな」

風を感じて、天を感じ――

光を感じて、地を感じる――

風に誘われ、天で舞い――

光に誘われ、地で舞う――

力任せに繰り出される男の斬撃をふわりとかわし、セフィアは手首を翻す。

いつも、その手にあったのは扇だった。

けれど今、その手にあるのは短剣だ。

それは、

紛うことなき武器。

それでも、

惑うことなき心。

惑うことなき心で以って、紛うことなき武器を振るう。

手にするものは違えども、基本は同じ。

世界の理を知り、己が世界の一部であることを悟る。そうすれば、
風が剣の軌道を教え、光が男の動きを教えてくれる。

「綺麗……」

舞うように短剣を振るう女の姿に、カイは掴んでいたクロウの服
から手を放し、思わず呟きをもらした。見上げれば、クロウもぽか
んと口を開け、ただ、ただ、その姿に囚われている。

カイは、静かに視線を、目の前舞う女に戻す。

風を感じて、天を感じ――

光を感じて、地を感じる――

風に誘われ、天で舞い――

光に誘われ、地で舞う――

すると声が聞こえた。目の前で舞う女の声だ。それは実際音にな
らざる声だったが、カイには確かに聞こえてきた。

女は言った。

ホルス、見えているか？　これが、俺が見てきた世界のすべてだ、
と――。

瞬間。

視界が開けた。

広がる色彩。

広がる音色。

広がる香り。

広がる熱。

「これが、世界——？」

風に揺れる小麦畑。

賑う市に色とりどりの果物。

地に影を落とし悠々と飛ぶ隼。

その空は青く、何処までも続く。

そして、そこに浮かぶのは温かな光を放つ——太陽。

視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚——全身で以って世界を受け止める。

「あたたかい……」

自分を取り巻く世界の心地よさに、カイは目を瞑る。

世界のどこにでも自分は存在し、自分がどこにいても世界は愛してくれる——そんな感覚。

世界のあたたかさに包まれて、カイの意識は、

深く——

深く——

沈んでいった。

セフィアが綺麗に着地をきめれば、今しがたまで剣を交えていた相手の体がぐらりと傾き、ドサンツと砂埃と共に地に伏した。

男の体のあちこちには血の滲んだいくつもの切り傷があり、心の臓を貫くように刺さった短剣がなんとも痛々しい。男との対戦を終えたセフィアは、血の染み一つ付いていない白い衣装を揺らし、男に歩み寄った。

男は死に、セフィアが勝ったように思われる。

男に歩み寄ったセフィアは男の死を確認しようと、おもむろに男の顔を覆うフードの手を掛けた。

刹那。

「――！」

バサッバサッバサッバサッバサッバサッバサ――
キイイイイイイイイイイイイイ――

視界一面の黒。黒。黒。

男だったはずのものは、何十羽ものコウモリと化し、空に消えていく。

「『宵の誘い』アイザック」

クロウが記憶から手繰り寄せたその名を口にする。セフィアはその呟きをしっかりと耳にした。眉を

顰めセフィアはクロウを振り返る。

「奴らの名を知り、奴らが裏切り者と呼ぶお前は何者だ」

「私は夜の民――カイがクロウと呼ぶ人物である以外の何者でもないさ」

その問いに静かに答えるクロウ。その目は自分に凭れ掛かるように規則正しく寝息を立て始めたカイを愛しそうに見詰めている。

「だが――あなたがもしそれ以上のことを知りたいというのなら、我々は場所を移さなければならない。違うか、ホルスの神子」

そう言って、カイを抱きかかえるとクロウは歩き出した。

尤もなことだ。

と、唇を噛んだセフィアは、クロウの言葉に従うようにその後にく。

神子と裏切り者、そして少年。
この出会いの現す意味は――
この時まだ誰も知りえなかった。

04・1 始まりの誓い

「『宵の誘い』^{よひのかほ}ともあろう者が、随分な手傷を負ったようだな」

わらわらと群れを成し飛んできたコウモリに向けて、先客である男はくつくつと喉の奥で笑う。

それが氣にくわなかったのか、群れから外れた一羽のコウモリが男に向かって牙を剥いた。

男は驚いた様子も見せず微動だにしないかのように見える。

けれど、コウモリの牙が男の首筋に食い込む寸前、忽然とコウモリの姿は消えた。

否。

消えたのではない。目にも留まらぬ速さで翻された男の手によって捕らえられたのだ。

「随分、戯れが過ぎるじゃないか『誘い』」

血の色にも似た真紅の眼に睨みつけられ底知れぬ恐怖を覚えたコウモリは、男の手から逃れようと懸命に羽ばたいた。しかし、男はそれを許さずコウモリを捕らえる手に力を込められる。

グッ、ギギギギギ——

室内に響く鈍い音。

男は唇に弧を描き、手から滴り落ちる血の温かさに目を細めた。手の内には、あらぬ方向に翼が曲がったコウモリが一羽。

「あーあ、『暁』^{あけぼの}ったら、また『誘い』の隷属殺っちゃったの？」

「……………」

血の香りに酔い、手を滴る感触に上機嫌だった『まだ見ぬ暁』という異名を持つ男は、室内に降ってきた声に、興が削がれたとコウモリから手を離れた。コウモリの体は床の達する前に砂と化し風に舞う。

「まったく、もう少し愛想良くしてくれたっていいじゃない」

そう言いつつ『暁』に向かい合うように腰掛けたのは、見たところ十四、五歳の少女。肩につくくらいのかせつ毛の強い銀色の髪を、顔の横の方で片方だけ三つ編みにしている。少女が動く度、その三つ編みが揺れ、まるでこの少女の活発さを表しているようだ。

「『湖面の月影』か。何しに来た」

『暁』は目の前で揺れる三つ編みをうつとおしそうに見詰め呟く。
『月影』は三つ編みにしていない方の髪を指に絡めながら『暁』を見て意地悪く笑った。

「あんたの愛しい義妹いもつとのように優しく呼んでくれたっていいでしょ、お義兄ちゃん」

「冗談も大概にしておけ。いくら義妹あいつと同じように振舞っても、お前は義妹あいつとは似ても似つかない。そう——魂の根源から言ってな」

静かな言葉だった。

だが、込められていた殺気に『月影』は浮かべていた笑みを消し、苦汁を舐めた表情を浮かべる。『月影』の首筋に嫌な汗が伝った。

「どうした。凶星を指され言い返す言葉もないか？」

真正面から鋭い眼光を宿す眼で睨みつけられ、『月影』は先ほどのコウモリの気持ちがあった気がした。
今すぐこの場から逃げ出したい。だが、『月影』にはそれが出来ない理由があった。

「随分、義妹君を可愛がっていらっしやるようで……。まあ、あなたの義妹と私が似ても似つかないのは認めるよ。だから、その殺気どうにかしてくれない？これじゃおちおち話も出来ない」

ふんつ、と尊大に鼻を鳴らして『暁』は殺気を収めた。それで『月影』から興味が失せてしまったのか、『月影』を視界から外す。だが、『月影』は『暁』の興味を繋ぎとめようと言葉を続けた。

「義妹の件は、まあ、置いとくとして、あんたがもう一つ気にしていることについて『誘い』が情報を持ち帰ってきたよ」

その言葉に、『月影』の予測通り、失せかけた『暁』の興味が僅かに戻ってくる。『暁』は気だるげに顔をあげ、再び『月影』を視界に納めた。

「『誘い』の持ち帰った情報をなぜお前が報告に来るんだ」

「帰ってきて早々の『誘い』を変に煽って怒らせたのは、どこのことだよ！」

「知らん、あいつが勝手に腹を立てただけだろう」

まるで子供の言い分だ。

『暁』の返答に、『月影』は溜め息を吐く。『暁』は冷酷な指揮官のような存在だが、時々、ごく稀に仲間内で一番年若い自分より幼く見えることがあるから不思議だ。

けれど、『暁』のこの性格は決して変わることはないだろう、とも思う。『誘い』もいい加減慣れば良いのに。と、『月影』は自分に伝言を頼むとさつさと自室へ消えた『誘い』の姿を思い浮かべ、微かな同情の念を覚えた。

「で、あいつが持ち帰った情報とは何だ？あいつは確か、太陽の瞳の搜索に当たっていたはずだが……」

「ちゃんと仕事はしてたみたいだよ。村人に悪夢を見せ、夢と現実との境界を曖昧にさせ、顕現した負の感情を操り、自らの支配下に置く。《始まりの誓い》の村の連中は、ほぼあいつの配下となつて、太陽の瞳の搜索に当たっている——ただ一人を除いてね」

「奴の詰めของさを報告に來たのか？」

「いんや、違ふよ。たった一人を悪夢に捕らえ損ねたことは大した問題じゃない。問題は、その一人がどうして助かつたか——だ」

「どういうことだ……」

含みのある『月影』の言い方に『暁』は先を促した。

険しくなつた『暁』の表情に『月影』も姿勢を正し、息を吸つた。

「裏切り者——クロウが手を貸したのさ」

クロウ——

その名を聞いた途端、ぼわつと『暁』の殺氣が膨れ上がり、『月影』は息苦しさに顔を歪める。

「クロウ、あいつが……」

自らもその名を口にする、感情の高ぶりが抑え切れそうになくて『暁』は握つた拳を目の前のテーブルに叩きつけた。

ダンッ！

その衝撃に耐えられなかったテーブルは、いつそ清々しいほど綺麗に真つ二つに割れてしまった。

ベッドの上で、うつすらと目を開けたアイザックは、近付いてきた気配に眉を顰めた。

「『戦慄』そこにいるんだろ。出て来いよ」

「おや、『誘い』殿の眠りを邪魔してしまったかな？」

名を呼ばれた『真夜中の戦慄』ことネル・カルマは、言葉とは裏腹に楽しそうな笑みを浮かべ姿を現す。薄暗い部屋の中、フードは必要ないとばかりにネルは顔を晒している。自然とその笑みが目に入ってきて、アイザックの眉間の皺がさらに増えた。紫紺の瞳を細め、漆黒の髪に入った血のように赤いメッシュをいじりながら近付いてくるネルに関わって、今まで良いことがあった試しがないのである。

「邪魔したと思ったら、少しは申し訳なさそうな顔しろよ……」

「ククツ、それでもそうしているつもり、なのだが——」

嫌な顔を隠そうともせず、アイザックが言えば、ネルは口角をさるに上げ笑った。

どうにも反省の色は見えない。

「いや、どう見ても面白がってるようにしか見えねえって！」

「おや、おや、『誘い』殿はご機嫌斜めと見える」

「誰のせいだよ！誰の！」

「……………」

無言。

暫しの沈黙。

「はて——思い当たらんな」

思い出したようにネルが口を開く。

その一言に、アイザックは切れた。

「何だ！何なんだ、その間は！お前、絶対自分のせいだってわかってやってるだろ！」

ゼイ、ゼイ、ゼイ——

ただでさえ、傷口に響くというのに、怒鳴り散らしたアイザックの息は上がる。だからなのか、アイザックは油断していた。

鋭い殺意を帯びた——

妬み、

恨み、

嫉妬へと、

ネルの目付きが変わったことに、気付かない。

そして。

ばっ、がぐうっ——

ベットを襲う衝撃。

その衝撃を感じたが早いか、

「う、ぐうっぐうっぐうっ、あああああ」

傷口を走った痛みに、声を抑えることもできずアイザックが呻いた。

アイザックを押し倒すようにして、傷口を踏みつけてネルがにいつと笑う。

「この傷が——神子につけられた傷か」
「う、ぐぬううううう」

傷口から血が滲む。

アイザックは呻くことしか出来ない。
それをいいことに、傷口を抉るようにして尚も力を加えるネル。

「神子殿は、私を捨て置いて、お前と遊んでいた——と、いうのか」

「ぐっぬう、あ、うううううう——は、な……せ……」

アイザックが途切れ、途切れに、辛うじて言の葉にすれば——
ドスッ！

鈍い音と共に、頬に新たな痛みが加わった。

傷口に加える力を緩めることなく、ネルが頬を拳で殴りつけたのだ。

「……………」

その行為に、その痛みに、アイザックは言葉を失う。

対するネルは拳を見詰め、目を細め——満足したのかベットから飛び降りた。

そして。

「行くぞ」

「……………は？」

「行くぞ」

行くってどこへ？

———というか、手負いの俺を連れ出す気……………なのか？

アイザックは思った。

無茶だ。

無茶苦茶だ。

けれど、そういったところでこの状況をどうすることが出来ようか。悲しいことにアイザックに拒否権はなく、ネルに襟首を掴まれそのまま——ずるりっ。ベットから引き摺り下ろされる。と。

あげくの果てにはボロ雑巾の如くずるずるとネルに引き摺られていった。

静かに後ろ手にドアを閉めて、セフィアは目の前の男を見据えた。クロウという名のその男は、抱えていた少年をベットのの上に下ろし布団を掛けてやると、手際よくカーテンを引いて顔を覆うように被っていたフードをはずした。

「よく眠っているな」と、クロウが少年の寝顔を見下ろし呟く。

右耳に二つ並んだ水晶の耳飾りがチリンツと鳴り、耳に掛かっていた少し長めの髪がハラリと顔に掛かった。

その髪の間から穏やかに細められた瞳が見えて、セフィアは場を包んでいた空気が一気に和らいだ様な気がした。

「ああ、そうだな。それにしても、よくあの戦闘中に眠れたもんだ」

クロウの言葉に同意を示しながら、セフィアは少年の眠るベットに近付き、窓際に立つクロウからは対面に腰を下ろす。ギシツとベットの軋み少年が寝返りをうった。けれど起きる気配は一切ない。本当によく眠っている。

「昨日、一昨日、ほとんど眠っていなかったようだからな」

寝返りをうった拍子に顔に掛かってしまった髪を除けてやりながらクロウが言った。

「寝ていない？どうして……いや、そもそも夜の民であるお前と昼の民であるこの少年に、どういった接点があるというんだ？」

それは少年の助けたい相手が夜の民だと知った時、一番最初に浮かんだ疑問だった。

クロウもその質問はあらかじめ予測していた範疇なのか、随分と落ち着いている。

けれど、言葉は選んでいるらしく、答えが返ってくるのには暫しの時間を要した。

「《始まりの誓い》の村、そして、太陽の瞳——お前はどこまで知っている、ホルスの神子」と、暫くしてようやく言葉を口にしたクロウ。

けれど。

太陽の瞳——その言葉は、まさしく不意打ちだった。

セフィアはその不意打ちを受け流すことも出来ずに狼狽した。

「な、なぜそれを！お前こそ、どこまで知っていると言うんだ！」
「うう、ん……」

張り上げた声にベッドの上で少年が身じろぎをした。セフィアは慌てて両手で自らの口を覆う。

「その様子だと、大概のことはもうご存知のようだ」

冷静なクロウの呟きがセフィアの苛立ちを煽った。が、少年が眠っている以上、声を荒げることは出来ない。代わりといっては何だが、セフィアは苦々しげにクロウを睨みつけた。

「だったらどうだって言うんだよ」

「いや、これからの話に大きく関わってくることだ。知っていてもらった方が話し易い。私が太陽の瞳を手に入れようとしたことが、

カイとの出会いのきっかけだったのだから……」

「お、おまつ——太陽の瞳が目的だったのか」

またしても。

不意打ち。

セフィアは、先ほどのことから、下手に声を荒げる失態は犯しはしなかったが、無意識のうちに強くなる声を抑える術はなかった。

「そうだ——と、言えば、私はお前の敵なのか？」

「……………」

なぜそんなことを聞くのだろう。

いや、そもそもなぜクロウが太陽の瞳のことを知り得たのか——

「…………裏切り者」

確かセトの配下はクロウのことをそう呼んでいた。

思わず口をついた呟きにセフィアがクロウを見れば、クロウは憂いを帯びた目を伏せ、口元に弧を描いた。

自嘲するような笑みだ。

いや、寧ろ。

悲しい笑み、と言っているのかもしれない。

「裏切り者——そう、呼ばれることを悔いはいしないさ」

と、クロウは言う。

「お前の目的は何なんだ」

太陽の瞳を手に入れることが、クロウにとってどんな得になると

いうのか。

それが見えてこない。

「人は、いつも取捨選択を行う。いつもその手に天秤を持ち、本当に大切なものはなにかを選ぼうとする」

「何が言いたい……」

「私にとって本当に大切なものは、地位でもなく、名誉でもなく、セトによる加護でもない、ということさ」

「……………」

じゃあ、お前の大切なものとは何だと言っただ——とセフィアは思った。けれど、それを口にする暇は与えられなかった。

「もう一度聞く。そうだ——と言えば、私はお前の敵なのか？」

「お前は——」

クロウは、地位も名誉も、セトの加護もいらなと言った。

その言葉が真実ならば、自分が選び出す答えは——

「俺は、お前が敵だとは思えない。いや、思いたくないだけかもしれないが。お前は、何かはわかんねえけど、その本当に大切なもののために太陽の瞳を求めたんだろう？」

「……………」

沈黙は、尤もな肯定。

セフィアはそう受け取った。

「だったら、俺も同じ。俺は大切な世界のために太陽の瞳を求める。俺と同じ思いで瞳を求めている奴を悪い奴だとは思いたくないのさ」

「神子……」

「何だよ。辛気臭せえな。セフィアって呼べよ。とりあえず、味方……とも言い難いけど、都合の良いことに敵も同じって感じだし、共同戦線と行こうぜ、クロウ」

「——いいのか？」

今更何を言うか！嫌なら最初からあんな質問するなよ。

と、怒鳴ってやりたくなったが、セフィアは眠る少年のことを思い寸でところで思い留まる。そして、やり場のないその気持ちを解消するように、クロウの胸を拳で小突いた。

「まあな！」

「……感謝……する」

そのやり取りに微かに頬を染め、クロウが呟く。

こんな表情もできたのか、と余裕の出してきたセフィアは思った。

「だが、共同戦線なんて格好良く言ってみたはいいけど、これからどうするか——まあ、《始まりの誓い》の村まで行くのが先決だろうけど、……そこで問題なのは、クロウ達が何で《薄明かり》の町に居たかってことだよな？」

そう言ってセフィアはクロウを見やる。

《始まりの誓い》の村は、今いる《薄明かり》の町からそう遠くはないが、大人の足で歩いて半日から一日は掛かる。

そんな距離をクロウはなぜ少年を連れて来る必要があったのか。そして連れのカイという少年は、どう見ても旅装とは言い難い格好をしていた。

セトの配下の襲撃もそうだが、村を離れるほどの理由——何か《始まりの誓い》の村で起こったとしか考えられない。

セフィアの危惧を証明するように、クロウは辛そうに目を伏せ言

う。

「《始まりの誓い》の村は、『誘い』の見せる悪夢によって支配されてしまった」

そしてクロウは、伏せていた目を瞑った。昨夜の出来事を思い出すかのように。

「悪夢が生み出す負の感情が、顕現されてしまったのか」

眼下に広がる光景——真夜中だというのに、大通りに集まりつつある村人達の姿——に、クロウは憎憎しげに唇を噛む。セトの配下が動いていることは気付いていたが、ここまで大掛かりなことをする者など一人しか思いつかない。

「宵の……」

「その通り——まさかここで会うなんてな、クロウ。いや、裏切り者と呼んだ方がいいのか？」

自分に寄り添い震える少年を背後に隠すようにして、クロウは声の主を振り返った。

「『誘い』」

「おお、お前にそんな目が出るなんて思わなかったぜ。姫さんの前でいつも優しい目をしていたお前に、なあ」

いつの間に現れたのか。

音もなく現れた声の主『誘い』は、ドアに背を預け立っていた。オールバックにされた紫紺の髪を撫で付けながら、『誘い』は鋭く細められたクロウの目を見て笑う。

「なぜ。なぜ、このようなことを！」

「ふう、それをお前が言うのか？俺以外にも夢を渡っている奴がいるって気付いた時点で、まさか、とも思ったが。俺が気付いて、お前が気付かない訳ねえよな。今更そんなに怒るぐらいなら、最初から全員助けてやればよかったのによ」

『誘い』は、クロウの背後に隠れる少年の存在を知っているかのよう
うに言う。

マントに縋る少年の体が震えているのをクロウは感じ取った。

その震えに、その恐怖に、クロウの胸は痛んだ。

大切なもののために、形振り構わず目的の達成を目指してきたのは自分自身。

だが、それはどこことなくあの子に似たこの少年を悲しませるだけの行為だったのか。そう思うと、苦しくて、苦しくて、仕方がない。

こんな自分にあの子は泣くだろうか。

こんな自分をあの子は嫌うだろうか。

「まあ、どっちでも同じこともな——お前を見逃すと、『暁』の野郎がうるさいだろうしよ。だから、お前は黙って俺に——殺される」

ヴォオオオーン。

『誘い』の声に重なるようにして鐘の音が響く。
感傷に浸り掛けていたクロウは、はっとした。

ただでさえ、夢と現実の境が曖昧となり負の感情に満ちた今、心を強く持たなければ『誘い』の思う壺だ。

チャキツ。

『誘い』が得物を構える音。

その音を耳にしても、クロウは得物を構えることなく思案する。

どうしたらこの状況を切り抜けられるか――

どうするのが最善であるのか――を。

そして。

『誘い』が切りかかってきた。その時。

クロウは、力いっぱい窓を開け放ち、少年の腕を掴むと窓枠へと飛び乗った。

「え？」

腕の中で少年は身を強張らせたままクロウを見やった。それに対し、少年に質問する暇も与えず、その体を抱き寄せる手に力を込めるクロウ。

「黙っている、舌を噛むぞ」と、少年の耳元で囁き。

クロウは跳躍した。

窓の外へ。

夜の闇へ、と。

腕の中で少年が、息を呑むのが聞こえたが、気にしない。いや、気にする余裕などないのだ。否応なく襲い来る重力と風圧に耐え、クロウは――

ばさりっ、

漆黒の翼を広げる。

それは一種の魔術。

夜の民として生きていく中、クロウが唯一覚えた魔法。

闇に溶ける翼を羽ばたかせ、クロウは飛んだ。

「へえ、俺と鬼ごっこでもしようっていうのかよ。じゃあ、精々楽しませてくれよ！」

「はあ」

事の顛末を聞いてセフィアは溜め息を吐いた。

村は既に敵の手の内。

芳しくない。

否。

恨めしいのだ。

自分の無力が。出遅れたことが。

そして、ここで問題となってくるとすれば。するならば。

「太陽の瞳の方は……太陽の瞳は無事なのかよ」

「わからない。だが——」

「だが？」

「セトの加護を持つものはホルス神の神殿に入れないのだろう？」

昨夜、自分自身が言われたことをクロウはそのまま口にする。

その言葉が正しいのなら、『誘い』はもちろん、その手の内に落ちた村人達も、神殿に入ることは適わないはずである。

「と、いうことは、クロウ、あんたは太陽の瞳の在り処が神殿だと？」

「アレがそうだという確信は持てないが、私が見たものがそうだとするならば、カイが神殿の宝物庫に仕舞った、と」

「神殿の中の造りについては？」と、続け様にセフィアは問う。それにクロウは首を横に振った。

「私は、村の中を満足に調べる間も無かったからな。知っているとするならば――」

「この少年か……」

二人は揃って寝息をたてるカイを見た。

「何にしろ、この少年が目覚めるのを待つしかないのか」

05・1 家族

光に包まれたあたたかな空間をカイは漂っていた。

「ここは……？」

「ここは、世界の深層——自らの根源を知る場所」

光に溶け合うように響いた優しい声。あの箱から聞こえてきたものに似ている。

「自らの根源を知る？」

そう——

君は自らを知り、
そして。

目覚めなければならない。

ガバツ——

言われた瞬間感じた浮上感にそのまま身を任せれば、一気に意識が浮上した。

自分がいたのはベットの上で、カイは訳がわからず辺りを見回す。

「ここは……？」

口をついたのは、先ほどと寸分違わぬ言葉。
だが。

自分がいるのは

「ようやくお目覚めか？」

混乱する頭でカイは声のした方に顔を向けた。すると、窓辺に置かせたソファでクロウが書物を読んでいる。

「あ、う、えーと」

自分の置かれている状況がわからず、カイは答えに詰まった。よくよく思い出してみれば、自分は寝て――

「つて、あの女の人！あの女の人だったの！」

「何だ、騒々しい」

問い掛けに答えた声は後方から。訳もわからず振り返れば。

「あー、お前やつと起きたのか」

「つて、ええええええええええ！」

タオルを手に、髪から滴り落ちる水滴を拭う女性の姿——の、
はずが。

胸がない。

湯浴みをしてきたからか、上半身裸で立つ彼女の胸には、確かに女性特有のふくよかな膨らみはなかった。ここ、必然的にそこにあるのは胸板なのだが。

「お、男だったんですか！」

カいは信じられないという目でそれを見た。

「何だ、起きて早々騒がしい奴だな。俺が男だったのが、そんなに残念か？」

この人が男――。

まあ、現実を突きつけられれば信じない訳にはいかないが。それでも端正な顔立ちで言われれば、目のやり場に困る。

服も着ずに近付いてくる女と見紛うほどの容姿の男に、カイは顔を真っ赤にしてうるたえた。カイはなんと純情だった。

「え、いや、うう……」

「そのくらいにしておけ。そして、さつさと服を着ろ」

それを見かねて、クロウが助け舟を出す。

クロウの眉間には皺が寄っている。なんとも不機嫌そうに。

「何だよ、クロウ。それが助けてやった俺に対する態度かよ」

「それなりの態度をとって欲しいなら、それなりの態度をとったらどうだ？」

男の言い分に溜め息を吐き、クロウはベッドの上に脱ぎ捨ててあった男の服をほうって遣す。

「なんでこう、夜の奴らは極端な性格が多いんだろうな」

服を受け取り男はやれやれと肩を竦めた。

そのやり取りの一部始終を見ていたカイは目を瞬かせた。

呆れた――という訳ではない。呆れたというより、寧ろ。懐かしい。

そのやり取りはどこかラオとよくやったやり取りに似ている。そう。だから――

「いつの間にか、仲良くなってる？」と、カイは思わず口にした。

その途端。

ばっ！と二人の視線はカイに集中する。その視線が交わる中心で、カイは言わなければよかったかなあ、などと思ってしまう。それでも二人が仲良くなったことは悪いことではないので、カイは安心した。

「で、カイ、とか言ったな」

「え？なんで俺の名前を」

「お前が寝ている間にクロウが色々話してくれたからな」

「クロウが？」

ああ、やはり、自分が寝ている間に何かしらのやり取りがあったのだ。と、カイは思った。

「そうだ。それで、俺はお前が目覚めるのを待っていたんだ」
目覚める、のを待っていた？

あの夢はこのことを指していたのだろうか。

「どうして俺が起きるのを待っていたんですか？えーと……」

「セフィアだ。セフィア・マラト」
セフィア――。

カイは少女と見紛うほどの美少年の名を口の中で反芻する。
そして、口に馴染んできたその名を戸惑うことなく口にした。

「で、セフィアさんは、どうして俺を？」

「……………それはだな」

それに困惑を示したのはセフィアだった。子供の無邪気な問い掛

け。

これが大人相手なら誤魔化しようもあるかもしれないが、素直な子供相手に下手な嘘を吐くと自分の首を絞めることになり兼ねない。と、セフィアは日々の旅の経験から、常識から少し外れた見解を持っている。

どう答えたものか。

考えあぐねるセフィア。

けれど、

「カイ、セフィアは、太陽の瞳を探しに来たんだよ」

先に口を開いたのはクロウだった。

「太陽の瞳？……あの箱のこと？クロウと一緒にだね」

「ああ、そうだな」

クロウは苦笑を浮かべた。

その表情を見て、カイは、ぽんつと手を打つ。

「あ！だからなのかな。二人がいつの間にか仲良くなったの」

やはり子供は鋭いな。

その時、セフィアはそう思った。

これで正直に話さなければならなくなってしまったことに、溜め息を吐く。

子供に余計な心配をさせたくない。それがセフィアの持つ本音だ。

「まあ、兎も角だ。俺とクロウは、太陽の瞳を手に入れるために共同戦線を張ることになった。それで、お前に聞きたいことがあったんだよ」

「聞きたいこと？」

「そう。神殿内部の造りや、村の構造について」

「教えてあげても良いけど、二人だけで行くつもり？」

じとり。カイはセフィアを見詰める。恨みがましそうな目で。

「——な！ だったら、どうだって言うんだ」

「俺も連れてって！」

その一言を予想していなかった訳ではないが。いや、寧ろ十分すぎるほど予想はしていたのだが。

「お前、自分が何を言ってるのかわかっているのか！」

思わずセフィアは怒鳴ってしまった。この少年は、今がどれだけ大変な状況なのかをわかっていない。それを知らしめる為には、出来る限り大人が強氣に出なければならぬ。

「わかってるよ」

「いや、わかってない！ 今、村に行くのは危険なんだぞ。折角、クロウに助けてもらった命を無駄にするつもりか？」

「……わかってる……」

カイは、ちらりとクロウの様子を伺い呟いた。カイはカイなりに考えている。

わかっている。

理解しているのだ。

自分がどれだけ幸運だったか、を。

それでも。

自分だけ助かったことに何の意味があるのだろうか。

自分だけ逃げ果^{おお}せることで自分は満足なのだろうか。

「わかつているんだ。それでも——村の人達が心配なんだよ。じつとなんかしていられない！」

カイにとつて、村の皆は家族だ。

孤児であるカイのたった一つの家族。

「もう頑として譲れないって目だな」

はあ、と溜め息を吐くセフィア。

カイの目は、セフィアやクロウと同じ。本当に大切なものが何かを知っている目だ。

こんな目をされたらもう反対は出来ない。

「わかった。同行を許可しよう」

セフィアはそう言って、ぽんつとカイの頭に手を置き優しく撫でた。

「敵は夜の民。俺たちは夜動くより、昼動く方が都合がいいだろう。明日、夜明けと共に

出発だ」

「それでいいな」と、セフィアはクロウに目を向ける。

クロウは元々自分がカイを巻き込んでしまった手前、二人のやり取りに余計な口を挟むまいとしていたためか、その決定に反対はしなかった。

「じゃあ、明日に備えて俺は寝るからな！」

二つあるベッドのうち一つはカイが占領している。セフィアは空いているベッドに入る。

これではクロウの寝る場所がないのではないかと、カイは心配そうにクロウを見詰めた。けれど、納得している様子のクロウは、ソファの上で自らのマントを被り身を丸くした。

カイはそれを見て自分の布団を手繰り寄せたが、今まで眠っていた以上すぐには寝付けない。迷惑かと思いつつ、カイはクロウにもう一度目をやった。

「ねえ、クロウ」

「何だ？」

「クロウの家族ってどんな人たち？」

「どうしたんだ、急に」

カイの質問にクロウは決まりが悪そうに眉を顰めた。心なしか声も低い。

「別にどうしたって訳じゃないけどさ……」

目を伏せるカイ。

「何だ、家族が恋しくなったのか？」

その真意を的確に察して、クロウの声音が優しくなった。

「そうかもしれない。俺、気付いたら孤児院育ちで、両親のことは覚えてないけど、村の皆が家族同然で——そんな皆と離れ離れになったのは初めてだから」

「そうか——辛いな。家族と別れるのは」

「クロウはさ、旅に出る時、家族と別れるのが辛くなかったの？」

一拍。

クロウは答えを探す。否。自身の出した答えを認めようとしていたのだろう。

「確かに、辛くなかった、と言えば嘘になる。それでも——悲しくとも、寂しくとも、それが家族の笑顔を取り戻すための旅なら辛くはないさ」

悲しくとも、寂しくとも——

それが家族の笑顔を取り戻すための旅なら辛くはない。

カイは思う。

この言葉はきつとクロウの本心から出たものなのだ。

「クロウは強いんだね」

カイが思わず口にした呟きに、クロウは首を振る。

「いや——それは違うな。強がってみたところで私は弱い。私は、辛くとも泣けないだけだ」

「クロウ？」

カイには、クロウの言う言葉の意味がよくわからない。それでも、クロウは言葉を続けた。

「——だからお前は、辛さを隠す必要はないんだぞ。寂しかったなら、寂しいと素直に言葉にすればいい。泣きたいなら、心ゆくまで泣けばいい」

ああ、クロウはやっぱり強いんだ。

そう思った瞬間——カイの視界はぼやけた。
なんだろう。触れてみる。

涙。

それは、涙。

涙が——

涙が止まらない。どうしてだろう。

「心ゆくまで泣けばいい」

再度クロウの声が響く。

ぽすつ。

感じたのは——衝撃。

感じるのは——ぬくもり。

気付くと。ソファから立ち上がったクロウに、抱きすくめられていた。

「ねえ、クロウ、俺の……俺の家族の話聞いてくれる？」

「……………」

クロウは黙ってカイの背を擦る。

それでも。

黙っていても。

クロウは話に耳を傾けてくれている。

そう感じて、カイは言葉を続けた。

「俺が家族と出会ったのはね、俺がまだ三歳の時。俺、両親のこと
も、自分の名前も全然憶えてなくてさ。しかも、神殿に突然現れた
んだって、ファトが話してくれた。あ、ファトはね、村の神殿の神
官で、俺の養い親なんだけど——俺が現れた時、神のお導きだっ

て、大騒ぎしたんだって。そんな訳ないのに。可笑しいよね」

カイはそう言って苦笑したつもりだった。

けれど涙はまだ止まらない。

クロウは尚も黙って話に耳を傾け、背を擦ってくれている。

「それから、孤児院での生活が始まって。ファトが皆に神話を読んでくれたり、皆で遺跡の発掘に行ったり楽しかった。あ、それから親友にも出会ったんだ。五歳の時に孤児院にやって来た、ラオ。クロウも会ったことあると思うけど……俺の親友で……俺の大切な……家族……」

うつら。

うつら。

最後まで言い終わらないうちに瞼が重くなってきた。

涙は疼くような微熱と心地よい疲労感を残し、ようやくおさまりを見せたようだ。カイは瞼の重みに耐えられず、その熱と疲労感に身を任せた。

瞼が閉じる瞬間にカイが感じたのは、背から離れるクロウの手の感触。そして、優しく囁かれるクロウの言葉。

「カイ、良い夢を……」

悪夢など見ない。

今日見るのは、楽しかったあの日々。

翌日。夜明けと共に《薄明かり》の町を出発し、《始まりの誓い》の村に到着したのは、太陽が南より西へ少し傾きかけた頃だった。通常なら昼食を終え、夕食の準備が始まる頃。通りには食欲をそそる香りがたち込め始める時刻である。

しかし、『誘い』の手の内に落ちた村は芳しい香りはおろか、人の話し声、鳥のさえずりさえ聞こえない。

辛うじて。本当に辛うじて耳に届くものといえば。呻き声、だけ。

いつ何が起こるかわからないという緊張感のもと、村に足を踏み入れた三人は、村の状態に啞然とした。カイにいたって、クロウのマントに包まり、身を隠すように耳を塞いでいる。

「おいおい、これじゃ、まともなはずの俺達まで気が狂いそうだぞ」
「そうだ。気を付けないと、私達まで引き釣りこまれない」
「いや、冷静にそんなこと言われてもな……」

そう言いつつ、セフィアはクロウのマントからカイを引きずり出す。

「——だとき。カイ、お前がシャキツとしなくてどうするんだよ」
「でも……」

「でも？村の奴らを助けたいって言ったのは、どの口だ、おい」

むにゅ。と、セフィアがカイの頬を引っ張る。

これが彼なりの励まし方なのだろう。

「いひゃい。いひゃいよ、セフィア」

そう言つて、カイが手をばたつかせる。

手加減はしているつもりようだが。

それでも、痛い。

「放して欲しいなら、シャキツとしろよ。シャキツと
する。するから」

「よし、約束だぞ」と、約束したところで、セフィアはやつとその手を放す。赤くなつた頬に手をやるカイの頭を撫でながら、黙つて様子を見ていたクロウに目をやった。

「それにしても――」

「何だ？」

「いや。俺は、荒々しい歓迎を予想していたんだが……」

「『誘い』か？今は昼間だ。その上、お前自身が負わせた傷もまだ癒えていないだろう。おそらく、夜にならないと姿を現すことはない」

「そうか。じゃあ、村人にかけた呪縛を解かせるのは後回しか。悪いな、カイ。そういうことだ。今は先に案内を頼む」

「セフィアが村の皆を助けるのに力を貸してくれるの？」

「なんだ。この状況を見捨てておけるほど薄情に見えたか？」

「……違うけど」

《薄明かり》の町の一件で、カイは十分セフィアの凄さを知っている。だからそんなことは思はずがない。けれど、その優しさが嬉しいと同時に切ないのだ。自分がしてもらったことと、自分がし

てあげられることの差異が大きすぎて。

「俺はホルスの神子だ。ホルスの大切な民を見捨てられるわけないだろう？だから、余計な心配はしなくていい」

「うん。ありがとう、セフィア」

代わりにカイは精一杯の気持ちを込めて礼を言った。

「——クロウもお前ほど素直なら良いのにな」

クロウがその言葉に眉を顰めるのが見える。けれど、セフィアは気にしていない様子で、もう一度カイの頭をクシャリと撫で、手を差し出した。

「行くぞ」

「うん！」

南北にまっすぐ伸びる大通り。それをまっすぐに行けば、村の中心、神殿へと到着する。クロウの言った通り、昼間に『誘い』は動かないらしく、無事に神殿まで到着できた。

けれど、小さな神殿——と言ってもセフィアの場合ウジャト神殿と比べてしまっているため、どうしても小さいと表現せざるを得ないのだが——の扉に手を掛けかけた時、カイの足が止まった。次いで、後方についてきていたクロウを見やる。

「——どうする？」

「大丈夫だ。セトの加護など当の昔に捨てている」と、クロウは頷く。

「ああ、なんだ。そのことを心配してたのか？そんなに心配なら、ほら——」

チャリンツ――

金属音をたててセフィアがクロウに差し出したのは、自身が身につけていた装飾具。金の輝きを放つそれには太陽と月が模されている。

「これは？」

「ホルスからの貰い物」

「ホルスからの？」

「そう。所謂お守りみたいなもんだな。まあ、あれだけの啖呵きつてたお前には、必要ないものかもしれないが、ホルスの加護の証みたいなもんだから。カイも心配しているし、一応つけとけよ」

クロウはカイの様子を窺うと、それを受け取り首から提げた。黒を基調としたクロウの服には、白を基調としたセフィアの服とは違った意味でその金がよく映えた。

「これで、いいのだろうか？」

「うん。よく似合ってるよ、クロウ。じゃあ、改めて開けるね」

満足そうにカイは扉に手を掛け、扉を開いた。

神殿の内部。

特に宝物庫へ至る道筋は複雑だ。それは一重に歴史的、文化的遺産の盗難を防ぐためであるのだが、この小さな神殿のどこにこんなに多くの仕掛けが成されているのか不思議なくらい《始まりの誓い》の村の神殿の造りは複雑だった。

もしかしたらウジャト神殿の仕掛けに引けを取らないかもしれない、とさえセフィアは思った。

同時にカイの同行を許可したことが、ここまで功を奏すとは思っても見なかった。

大聖堂にある仕掛け扉。

迷路のような道筋。

右。左。左。と、始めは道筋を覚えていたセフィアも角を曲がる回数が増えるにつれ、それは意味を成さなくなっていく。わかるのはどうやら地下に向かっていているということと、段々と近付くホルスの神気だけである。

「ホルスの神気が強まっていく。この先か……」

「うん。この角を曲がれば、宝物庫だよ」

角を曲がると、視界に飛び込んできたのは重厚な造りの扉。

カイは迷わずそれに手を掛ける。

物々しい造りの割に扉は子供の力でも簡単に開いた。

そのあっけなさに呆然としている、と。

宝物庫の中から溢れ出す、神子であるセフィアだからこそ見える神気。

朝日のような輝きを放つ帯。

通常なら窓もなく、換気口もない宝物庫はかび臭いはずなのに、その空気は澄んでいる。

その神気を放っているのは一つの箱。

扉を開くや否や目に飛び込んでくる位置に配置されたそれ。

セフィアは一変、息を呑んだ。

「——強いホルスの神気が宿っているな」

「でも、開ける方法がわからないんだよ」

セフィアが箱を手にするのを戸惑っていると、カイは代わりにクロウにそれを差し出した。

「確かに鍵穴がないな——セフィアは開け方を知らないか？」

一通り目を通したクロウが、今度はそれをセフィアに渡す。

「いや、ホルスは何も言っただけだ。何か特別な鍵があるのか、あるいは――」

「中身がどうのと言うよりこの箱自体が？ 鍵？ または？ 瞳の一部？^{パーツ} という可能性もあるな」

「ああ。何にせよ、これが見付かったときの状況、そしてこれだけ強い神気。この箱が太陽の瞳に関わる物であることは疑う余地はないさ」

そう言っただけで、セフィアはその箱をもう一度カイの手に戻す。いくら神子であるセフィアでも、長くこの神気に触れているのは辛かったのだ。

それにしても。

と、セフィアは思う。

神子である自分でさえも長くは触れてられない強い神気をカイはなぜあんなに平然と受けていられるのか。

通常、神気を意識的に感受できる者は少ない。けれど、意識しなくても神気は人に影響を及ぼす。例を挙げれば、ホルスが懸念していた月の瞳の影響もその一種だ。純粋な子供、神官や神職者はそれが神気だと気付かなくとも、ある程度それに触れることは平気だ。だが、仮にそうだとしても、カイの場合は異常と言っている。

セフィアはもう一度確認するように箱を手にするカイに目を向ける。

と、その時。

ドゴオーン！

「――！」

響いたのは鐘の音？

いや、何かが違う。

「地上で何かが起きている」

クロウが眉を顰め言う。

「そのようだ。『誘い』が動き出したのか……急いだ方が良さだろ
うな」

「ああ、わかっている。カイ——」

セフィアに答えながらクロウがカイに手招きをした。

「なあに？」

「つけている」

クロウがカイの首から通してやったのは先ほど、セフィアから借りた宝飾具だった。

「クロウ、これは……」

「私は大丈夫だ。だから、お前がつけている。ホルスの加護がきつ
と守ってくれる」

クロウは微笑むとそのままカイの手を引く。

「地上まで案内を。でも、いいか、危険だから神殿からは絶対に出
るなよ」

カイは、二人の背後から恐る恐る通りを見やる。

「地上まで案内を。でも、いいか、危険だから神殿からは絶対に出るなよ」と、クロウは言った。

けれど。

通りに佇んでいたのは見覚えのある人。

大切な家族の姿。

「ファト！」

「待て！」

カイの歓声とクロウの制止が重なる。

クロウは手を伸ばしたが、その手を振りきりカイは駆け出した。姿を現した養い親に向かって。

ああ、ファトだ。ファトなんだ。

手にしていた箱を手放し、歓喜に満ちた表情を浮かべ、伸ばされた腕にそのまま飛び込む。すると、馴染み深い香りにカイはファトに顔を埋めた。

「——ファト」

この存在がファトであることを確かめるようにカイはその名を呼んだ。

……けれど。けれども。だが、しかし。
なんだろう。

どこか。

おかしい。

違和感――

そうだ、これは違和感だ。

いつも優しいファト。

抱きつけばいつも撫でてくれる手。

温かく包んでくれる熱。

それが――

感じられない。

「カイ、離れろ！離れるんだ！」

その違和感を意識してしまうと、今まで聞こえなかったクロウの
声がかいの耳に届いた。

「クロ……――！」

クロウの名を呼ぼうとしたカイだったが。

ぞくりっ。

体にはしった悪寒。

体を巡った痛み。

「痛い
痛つつう……」

首筋に感じる冷たい感触。

カイは腕の中に捕らわれた。

カイは事態に囚われた。

ファトが手にしていたのはナイフ。

そして、それは今――カイの首筋にあてられている。
ファトがどうして……

感じたのは底知れぬ恐怖。

ああ、これが、

夢ならば、よかったのに。

悪夢ならば、まだ、よかったのに。

ファトの腕の中、カイは呆然とするしかない。セフィアもクロウもあまりの事態に手が出せずにいる。

そんな中――

「ククツ、また会ったな。神子殿」

ファトの背後から、聞きなれない声が響いた。

神子？ セフィアのこと？

カイは声の主を視界に納めようと体を動かす。それに合わせて強まるファトの力ともう一つ振ってきた声。

「逃げようなんて考えるなよ。あいつ等を始末したらお前も村の奴らみたいに楽にしてやるから、さ」

この声にはカイにも覚えがあった。クロウを襲った嫌な奴。

「『宵の誘い』！ それに、『真夜中の戦慄』まで！」

ファトの背後に立つであろう二人に向けて、クロウが声を張り上げる。

「ほう、『誘い』の言ったように、本当に裏切り者は神子と手を組んだらしい」

クツクツと『戦慄』が笑った。

「おいおい、『戦慄』お前、俺の言葉信じてなかったのかよ！」

それに対し、気分を害したらしい『誘い』。

いや、実際、『誘い』の気分は最悪だ。傷が癒えないまま、理不尽にも連れ出されたのだから。

「仲間割れは別に構わないんだけどさ。カイを離せ。そして、村人も解放しろ」

二人のやり取りを見せいたセフィアが、カイに大丈夫だと微笑みかけ、そのやり取りを遮った。

『戦慄』はまたクツクツと笑い、ファトの後ろから一歩、前に出る。『誘い』が纏っていたのと同じ黒いマントがひらめいた。

「相変わらずのようで、うれしいぜ。神子」

「お前は相変わらず変態のようだな『戦慄』」

「おや、神子殿にその名を呼んでもらえるとは、至福の極み」

「はん、いつそのこと『真夜中の変態』にしたらどうだ？」

「ギャハハハハ——こりゃ、いいや。傑作だ！」

大声をあげ笑う『誘い』。その拍子にファトを操る力が弱ったのか、ファトの腕の力が弱まる。

もぞりっ。

カイは身動きをした。もう少しで抜け出せそうだ。

しかし、そこで『戦慄』が振り返った。

フードから覗くのは鋭い眼光。紫紺の冷たいその視線に、カイの体は一瞬にして強張った。

動けない。

否。

動きたくない、のだ。

その眼に、敵として映るのが怖い。

「『誘い』は相当命が惜しくないとみえる」

殺気を含んだ視線。

「あれ、『戦慄』はお気に召さなかったのか？」と、その視線を至極楽しそうに受け止めて『誘い』も一歩前に出る。『誘い』は『戦慄』とやりあう機会が出来て嬉しそうだ。

だが、カイは、

怖い。怖い。怖い怖い怖い――

怖くて、怖くて、たまらない。

殺気に当てられ意識が錯乱する。
と。

「動くな！」

ク――ロウ――？

響いたのはクロウの声。

朦朧とする中、声の方へ意識を向けると、『誘い』の首筋にピタリとナイフを当てたクロウの姿がある。

「なかなかやるな、裏切り者も。俺たちが互いに気を取られている間に背後に回り込むとは」

「ギャハハ、それこそ裏切り者の考えそうなことだぜ」

首筋に刃物が当てられているというのに、緊張感なく『誘い』が笑う。

「黙れ！形勢逆転だ。早く皆を解放しろ！」

「いんや、黙らねえし、その申し入れは受け入れかねるぜ。あれか、

「ほお、裏切り者にあのお姫様と同じくらい大切な者がいたなんてな」

感情を隠そうともしないクロウに、一部始終を見ていた『戦慄』は目を細める。

「ホントだぜ。あいつがあんなに取り乱すところなんて、見るの初めてだぞ。まあ、こっちとしては殺^やり易くて良いけどな」

クロウの拘束から逃れた『誘い』が『戦慄』の横に並ぶ。そして、間を置かず。

「殺^やれ」と、『誘い』はファトに指示を出した。

ドサツ。

ファトは動かなくなったカイの体をなんの感慨もないかのように離す。カイの体は支えを失い、力なく地に落ちた。

舞った土埃が微かに視界を悪くしたが、崩れ行くカイの体から目を放すことがなかった、否、目を放すことができなかったクロウは、状況も省みず駆け寄ろうとする。

「——カイ！」

カイだけを視界に捉え、カイだけに駆け寄ろうとするクロウ。

クロウだけを狙い、クロウを殺すことだけに意識を向けるファト。クロウはもうカイだけしか見えていない。

ファトはもうクロウを間合いに捉えている。

二人が交わる交差点。

ファトは先ほどまでカイに向けていたはずのナイフを、クロウの急所に向け、突き刺した——

キイイーン！

金属音。

次いで。

重量のあるものが倒れる音。

「俺を忘れてもらっちゃ困るね」

地に倒れたのはファトの方。地に伏したファトの手から、ナイフを拾い上げ、挑発するような目を『誘い』と『戦慄』に向けたのは

セフィアだった。

「へえ、あんたはクロウみたくあの坊主なんて気にしてないわけ？」

「何とでも好きに言えばいいさ。俺は俺のやるべきことをするまで

……二人まとめて相手になるぜ」

「ふん、面白い。もう日も暮れた。夜の領域で俺たち二人を相手に戦うだ？」

『戦慄』の言葉通り、もう日は暮れ、辺りはだんだんと闇に包まれてきている。けれど、ここでセフィアは引くわけにはいかない。

カイはもういない。それでも、カイとの約束は必ずだ。そして、何よりもう一人——今の状態のクロウを放っておけない。クロウはもうすでにセフィアにとって仲間、なのだ。

「ああ、二人まとめてかかって来いよ」

手に汗が滲む。

けれど。

仲間のため。

そう決意を固めたセフィアに怖いものなどない。

「そうではなくては楽しくない。『誘い』、神子は俺が殺^やる。お前は手を出すなよ」

力強いセフィアの目を見て、『戦慄』は満足そうに剣を構えた。

「って、言われても俺もそいつに借りがあるんだけどよお」

納得いかない様子の『誘い』。

「手を出すなよ」と、『戦慄』は念を押す。

「あー、はいはい、わかりましたよ。じゃあ、俺はあの腑抜けた裏切り者でも始末してくるかな」

「させるか！」

折れた『誘い』は、クロウの方に足を向ける。

それ阻もうと身を翻すセフィアだったが、

「お前の相手は俺だろう？」

セフィアの前で剣を構える『戦慄』がその行く手を阻んだ。

ちっ、とセフィアは舌打ちをする。

そして、心強い仲間の名の空に向かって口にした。

「ウィン！ クロウのことを頼む」

ピーキウウルル

鳴き声と共に一羽の隼が『誘い』の行動を遮るように舞い降りた。それを見届けて、セフィアは『戦慄』に向き直った。

「カイ！ カイ！ しっかりしろ！」

心の臓を貫かれ冷たくなっていくカイの体を抱え、クロウは呼びかけ続けた。

背後ではセフィアが一人、敵と応戦しているが、クロウにはもうどうでもよかった。

本当に大切なもの——一人の少女を助けるために始めた旅が、もう一人大切だと思えるようになった少年を失う結果で終わるのかと思うと、クロウは遣る瀬無かった。

「カイ！ 死ぬな！ 死ぬなよ」

必死に呼びかけ続けるクロウ。

あの子に似たあの笑顔が見たかった。

あの子に似たそのぬくもりが愛しかった。

あの子に——

「大丈夫だよ——」

後悔の念が渦巻く心に響いたのは、大切な少女のあたたかい声。クロウが悲しみに歪む顔をそっとあげれば、月の光を思わせる銀の髪を持った少女が立っている。クロウは幻でも見たような目でその姿を見た。

「——セレ？」

月の光が見せる幻か。

いつの間にか日が暮れた空には、満月が昇っている。

クロウは、月を視界に納め思う。

それでもいい。

大切な義妹いもこが目の前に立っている。カイを失った悲しみを癒してくれるのは、天秤のもう一片——同じくらい大切なこの少女しか有り得ない。

クロウは藁にも縋る思いで、少女の名を呼び、手を伸ばした。

「セレ」

月の光が見せる幻は、そっとその手をとった。

けれど——

握らせたのはカイの手だった。

「大丈夫。大丈夫だよ。クロウ義兄にいさん」

耳元で少女の声が響く。

「この子は——、この子の光は、いつの日も世界を包んでくれるものだから——」

繰り出される斬撃。

止める。

手に伝わる衝撃。

「——くっ」

間をおかずの襲撃。

避ける。

頬を掠める風圧。

舞うように。

飛ぶように。

セフィアは『戦慄』の攻撃を受け流す。

大口を叩いたセフィアだったが、それでも夜の領域では『戦慄』

一人の攻撃に防戦一方だ。『誘い』の相手をホルスの象徴である隼のウインがかつてでてくれているため、現状としてはどうにか対応できているといえる。

「防戦一方とは、つまらぬではないか。神子、お前の本気を見せてみたらどうだ？」

「……………」

「大口を叩いた割りに出し惜しみか？」

止むことなく繰り出される『戦慄』の斬撃を、ただ。ただ。防いでいた——のだけれど。

「くっ——」

重たい斬撃を短剣で何度も受け流していたために手が痺れる。
そして、とうとう防ぎきれなかった斬撃がセフィアの体を襲う――

やられる、とセフィアは思った。
けれど、

「――！」
「眩しっ！」

あがったのは『誘い』の声。
その声と共に、襲撃は頬を掠っただけで逸れた。
その原因を作ったのは光だった。
忽然と舞い降りた光。

光源は二つ。
一つは、空から――淡く優しい輝き。
一つは、大地から――強く人を惹きつける輝き。
『誘い』はウインとの攻防の手を止めている。
あがった声に『戦慄』は光源に目を向け、いつしかこちらの攻防の手も止まっていた。

「お姫様が降りてきたのか……」
「姫？」

セフィアは首を傾げる。

「あ！ 何、口滑らせてるんだよ『戦慄』！」
「ふん、このくらい大したことではないだろうに」
「まあ、なあ、そうかもしれないけど。あ、それより俺ら、こんなことしてないで、姫さんをどうにかしなきゃ後々『暁』がうるさい

んじゃないか？」

「それもそうだが、あれは月の光が見せる幻影だ。どう対処しろと？」

「……………あー」

「それより、俺はあちらの光の方が興味深い。確か、お前がこの村に来ていたのは太陽の瞳の奪取だったと思うのだが、あれがそうなのか？」

太陽の瞳。

その存在を思い出して、『戦慄』の言葉に『誘い』の目がその光源を捉えるよりも早く、セフィアは地上のその輝きへと目をやる。

輝きを放つのは、あの箱。

『誘い』や『戦慄』が手出しできないように、神殿の入口に置かれた箱が放つ光。

強く人を惹きつける輝き。

「太陽の瞳が……………」

この光を放っているのか。

これが太陽の輝きなのか。

光を肌を感じセフィアは思う。

いや、どこが違う。これは、世界が記憶する太陽の光ではあるのだけれど、どこが違うのだ。

太陽の光を嫌う夜の民にはわからないことだろう。けれど。

真の輝きとは言えない。

どこか、完全じゃない太陽。

どこか。

どこかが、欠けている。

欠けているのは——何？

欠けているものの正体を探ろうと、セフィアは目を細め、光の中に視線を泳がせる。

と。

セフィアは空から降りてきた輝きの中に少女の面影を見た。

「あれが——姫？」

その少女の面影は箱の方に、否、カイとクロウのもとへゆっくりと近付いていく。

クロウが何事かに気付いて口を動かしたのが見えた。そして、それに答えるようにして、光の中の少女の面影が優しく微笑み、手を伸ばす。

少女の手はカイの体に触れる。

そう思った瞬間——

サアアアアアア——

と、光が地を駆け、広がっていく。

空と大地。

二つの輝きが重なり合って、光が。

光の波が。

すべてを包んでいく。

カイが最後に目にしたのは、自分に駆け寄るクロウの姿――
伸ばされた手を取ろうとして、手は虚しく空を切った。

それと共に背中に伝わったのは衝撃に、カイの意識は薄れていく。
そして。

目を覚ましたのは、

深い――

深い――

世界の深層。

自らの根源を知る場所。

そこは同時に、太陽と月、空と大地、過去と未来の交わるところ――。

それは、過去――。

人間を超越した力を持った人間のように感情豊かな神々が、亡きオシリスの跡継ぎの決定を喜ばんとしていた、まさにそのときのこと。

「私は認めない。この国を治めるのは私だ。お前ではない！」

欺かれ陥れられたと気づいた候補者・セトが、巨大な豚に姿を変え、彼の甥にも当たるもう一人の候補者・ホルスに襲い掛かった。

「ホルス！」

息子の危機にイシスは叫び、ラーを初めとするその他神々も息を飲んだ。

突然の襲撃に動作が遅れたホルスは、豚となったセトから逃げる事が出来なかった。

「私が裂き殺してくれる！」

ホルスの両眼から、紅い紅い花が散った。

耳に痛いほどのセトの高笑い。イシスの悲鳴。神々の怒号。

そして、ホルスの絶叫が響き渡る――

「ふははははは！太陽と月は我が手に落ちたぞホルス！」

「くっ、セト、すぐに我が瞳、太陽と月を返すんだ！」

「馬鹿め！私がお前の言うことを聞くと思っているのか。お前は太陽と月を失い、地上を統べる者、神々の長、最高神としての権利を失うのだ」

セトが手にしたホルスの両眼をうつとりとした目で眺める。

「心配せずとも、この私が、おまえ以上にうまくこの地を治めてみせよう」

ツカツカと、ホルスの眼前まで進むセト。

先ほどホルスの目を決るのに使った柄にルビーをあしらった短剣を手にしている。

「お前如きに勤まるかな？」

ホルスは痛みには耐えながら必死に言葉を紡ぐ。

「ふん、すぐにその減らず口をたたけなくしてやる」

セトは手にした短剣を振り上げた。

「死ね！　ホルス！」

「ウイン！」

セトが短剣を振り下ろすのと、ホルスが叫んだのは同時だった。
ピーキウウル

上空から急降下してきた隼が、セトの短剣を弾き飛ばす。その短剣を慌てて拾い上げようとするが、短剣を拾い上げたのはホルスだった。

「形勢逆転だな、セト」

「くっ」

今までホルスに向けていたはずの短剣を己に向けられ、セトは唇を噛み締めた。

「セト、もう一度だけ言う。大人しく、我が瞳、太陽と月を返せ」

「くっ、嫌だといったらどうする？」

「お前は、嫌だと言えないさ。今の状況を分っているだろう？」

短剣の切っ先がセトの首筋に食い込み、一筋の血が流れた。そこまでの成り行きを、他の神々は押し黙って眺めている。それはセトの側についた神々も同じことだった。皆最高神であるホルスの迫力に口を開くこともその場を動くことも出来なかったのだ。

セトはホルスを睨み付けた後、力なく肩を落とした。

「観念したのか、セト」

ホルスが短剣に加えていた力を緩めた。そしてセトの手から己の瞳を取り、そのまま配下にセトを連行するよう指示を出す。

だが。

ホルスは自らで手を下さなかったその軽率さを次の瞬間——悔いた。

「ぐはっ！」

配下の神々が一斉に血を流し倒れた。血溜まりの中に一匹の銀狼がいた。

銀狼はホルスの姿をその目に捉え、次の瞬間——

ホルスに飛び掛った。

慌てて呪文を紡ぐホルス。

けれど。

銀狼の動きの方が一瞬、早かった。銀狼はホルスに飛び掛り手にしていた瞳のうちの一つ、月をくわえ、地上へ向けて走り去る。

その銀狼の正体はセトだったのである。

「セト……」

太陽の瞳を手に、空いたほうの手で出血の酷い目元を押さえながら、ホルスは力なく地に腰を下ろした。

「ホルス……」

母のイシスが、自らのシヨールを心配そうにホルスに差し出した。

「母上……」

ホルスはそのシヨールを受け取り、止血のために目の周りに目隠しをするように巻く。見る見るうちにシヨールは血に染まり、傷の深さを物語っているようで痛々しい。

「わたくしは、セトがあのように執念深いだなんて思ってもみませんでした」

血に染まったシヨールを見ていられなかったのか、イシスは目を伏せ呟いた。

「それは私も同じことです。でも、こうなった以上、セトを倒さない限りこの世界に平穏は訪れない」

「そうね。月の瞳を持ち去ったということは、セトは、夜の種族、闇の生き物達と手を組むつもりでしょう。月の瞳が地上で与える影響だけでも大きいというのに、このままでは、地上の——世界の均衡が崩れ兼ねないわ」

「最高神になることを欲するあまり、自らで世界の均衡を崩そうとすると——」

「セトはもう世界すらどうなっても構わないのかもしれない」

「母上、それは——」

「セトは孤独な人。そして、あなたの父オシリスを憎んでいた。これは、セトの復讐の始まりなのかもしれない。セトは、世界なんてどうでもよくて、あの人の——オシリスの作り上げたものを全て壊してしまいたいただけかもしれない……」

悲痛なイシスの呟きに、ホルスは見えないながらも励ますようにその肩に手を置いた。

「母上、地上を——世界を絶対私が守って見せますから。どうか、

そのように悲しまないで……」

「でも、どうやって？月の瞳がセトの手にある以上、夜はセトに支配されたも同然」

イシスの言葉に、ホルスは決意する。

その決意を変えないためにホルスはそれを言の葉にした。

「太陽を、太陽の瞳を地上に降ろします」

「ホルス！ まあ、なんてこと！あなたは太陽まで手放すというの！」

「母上、落ち着いてください。母上はご存知ないのですか？月は、太陽の光を受けて輝くもの。月が太陽の光を受けて輝くものである限り、セトは月の真の力までは支配出来ない」

「でも、それなら、太陽の瞳はあなたの手元に置いておいたほうが

……」

「母上」

ホルスは首を横に振った。

「セトは月の瞳を地上に持ち去った。月が地上に与える影響を軽減し、世界の均衡を守るためには、太陽を月の近く——地上に降ろすのが一番良いんですよ」

「……………」

「大丈夫、心配しないで、きっと時が来ます。世界が太陽と月の再会を望む時が。太陽と月は二つで一つ。世界にはなくてはならないものですから」

やんわりと微笑むホルス。

そして。

手にした太陽を掲げる。

「行っ
ておいで、太陽――」

世界が望むその時まで……。

「――これは？」

「語られることのなかった真実。そして、君自身が見てきた記憶」

カイの呟きに答えたのはいつか聞いた優しい声。

「俺自身が？ どうして……」

「まだ君は思い出し切れていないみたいだね、自分自身のことを」

「訳がわからないよ！ 俺がなんだっていつの！」

「あの箱の中身は記憶だった。君を指させるための鍵」

「全然わかんらない……そもそもあなたは誰なの？」

「私か？ 私は、そうだな……君の親であり、君自身であり、君の子である存在とでも言っておこうか」

「親？ 子？ 俺、自身？」

「――おやおや、余計混乱させてしまったかな？ まあ、いい」

声はそう自己完結する。

「よくないよ！ 俺、親のことなんにも覚えてないんだ。だから、あなたが僕の親だというなら、教えて！」

自分はまだ何もわかっていないのに、勝手に話を終わらせる声の主に苛立ちを覚えて、カイは声を張り上げた。

「何をだい？」

やれやれ、とでも言いたげに答える声。

「どうして、あなたは俺を捨てたの？　どうして、あなたは今頃俺の前に現れたの？」

「捨てた——その表現は適切じゃない」

「でも、事実、俺は孤児としてファトに育てられた。それは、あなたが俺を捨てたからに他ならないでしょ？」

「……………ふう」

声の主は、カイの言い分に今度こそやれやれと息を吐いた。そして、

「確かに、君は孤児として育った。けれど、そのファトは君に何と言った？」

と、逆に問い掛ける。

答えに詰まったのはカイの方である。

「それは…………」

「神の導き——そうファトは言わなかったかい？」

「でも、例えそうなら、俺は…………」

「カイ。先ほど見たヴィジョンは語られることのなかった真実だ。それを、なぜ君が知りえたのか。それは、君自身が見てきたからに他ならない。その真実が示すのは何なのか——まだ、認めたくはないのか」

「でも、それじゃあ、俺は…………」

「ホルスは地上に瞳をおろすとき、一つの封印を成した。セトに太

陽の存在を感じかねない為に、瞳に刻まれてきた記憶とそれが宿す力を別けた。記憶を取り戻してこそ太陽が完全な存在となるように。そしてその封印は十分に功を奏した」

「俺は……」

「記憶はあの箱に。そして、力は——」

「ホルス！ わかった。わかったから、それ以上は言わないで！」

声の主・ホルスは必死に訴えるカイの姿に言葉を飲み込んだ。そして、辺りを包んでいたあたたかな空気——彼の神氣——がカイを抱き寄せるように収縮した。

「カイ、悲しまないで。君が君であることにかわりはないのだから……」

優しい声が耳元で響く。

「……………」

「君の思い出はすべて君のもの。カイがカイとして生きてきた証。そして、今こうして抱いている気持ちも君のものだ」

「……………」

「カイ——君は今どうしたい？ このまま世界の深層で眠りに就くのもいい。だけど、君の放つ光を待っている者達がいる」

「だけど、それは……」

「君の輝きがどれだけ人を勇気付けてきたことか。クロウという名のあの男は、君が太陽の瞳だから、君を助けた訳じゃないだろう？ 君自身、カイが放つ輝きが彼を癒し、勇気付けた」

「俺が、クロウを？」

自覚などない。寧ろ、勇気付けられてきたのはカイ自身の方だ。そう思ったカイだったが、その考えは思わぬ形で否定された。

「そうだよ。だから、クロウ義兄^{にい}さんをこれ以上悲しませないで」

割って入ってきたのはまだ幼い少女の声。高く澄んだその声をカイは知っていた。カイは、思わず声のした方へと目を向ける。

「君は！ 君は夢で会った、あの――」

腰まであろうかという長さのふんわりと柔らかそうな銀の髪。
白い肌に、朝焼けのように鮮やかな唇。
そこにいたのカイが焦がれて止まなかったあの少女だった。

「私は、セレ」

カイが夢で聞きそびれた名を、今度ははっきりと名乗る少女。

「セレ？」

「うん」

少女の存在を確かめるようにその名を口にすれば、少女はそれに答えてくれた。

「セレ、こんな所まで来て大丈夫なのかい？」

ホルスの声が少女に問いかける。

「この姿はホルス様のように意識だけを飛ばしている幻影。だから、長くは居られない。それでも、一言だけでいい。カイに伝えておきたかったから」

「俺に？」

「そう、カイに——あのね、私は待っているからカイの訪れを。だから、あなたの輝きを私に届けに来て……」

「——！」

少女はカイの手を取り微笑んだ。待っているから——と。そして。

ぱあああああん。

霧散。

弾け飛ぶ。

少女の姿が光となって。

あとに残されたカイは、その光を掻き集めるように手を動かしたが、少女の姿はもうどこにもない。カイは少女に握られた手を見詰め、ゆっくりと手を胸へとやった。

何だが、不思議と気持ちが軽くなった気がする。

「カイ、君は今どうしたい？」

ホスルが先ほどと変わらぬ声音で再度問い掛ける。

「俺は——」

俺は——

俺は——

「最初から答えは出ていたんだよね」

俺は——

守りたい。

助けたい。

大切な家族を。

大切な仲間を。

「願ってしまうんだ」

会いたい。

会いに行こう。

待っていると言ってくれたあの子に。

しっかりとした決意を胸に、カイは、ゆっくり、ゆっくりと瞼を開ける。

さあ、目覚め太陽よ――

明けない夜などないのだから――

セフィアと同じく光の波にのまれ、眩しさに目を瞑るしかなかったクロウ。

けれど。

彼は光の波の中、弾かれたように瞼を上げた。

「あたたかい……」

光が——ではない。

いや、もちろん、クロウの周りを包む光は独特のぬくもりを持っていた。しかし、光の波の中に姿を消してしまった少女と共に、そのぬくもりの質は変わりつつある。

その変化をもたらしたのは他ならぬ、彼の腕の中に在る存在だった。

冷たくなりつつある体。

そのはずだったのに……。

「あたたかい」

戻りつつある体温。

クロウはカイの手を強く握り、その名を呼ぶ。

「カイ」

その呟きは懇願——に近かったけれど。

「――！」

辺りを包んだ光の渦がおさまりを見せていく。
ある一点に向けて。

腕の中の少年に向けて。

クロウが見たのは光に溶け合うようにして消えていく少年の胸に
あった筈のナイフ。

そして、ぴくりつと少年の瞼が揺れた。

「クロ……ウ……」

名を呼ぶ声。

姿を捉える金の眼。まなこ

すなわち。

漏れる吐息。

上げられた瞼。

戻ってきた――ぬくもり。

「カイ……」

クロウは少年の名を呼ぶ。今度は、確認するように。

「うん。そうだよ、クロウ」

カイはそう言ってクロウに微笑んだ。

「ああ、カイ。よかった！大丈夫なのか」

クロウはその言葉を聞いて、今にも泣き出さんばかりに顔を歪め

る。

「心配掛けてごめんね、クロウ。でも、もう大丈夫。夜明けが来たから」

と、カイは言う。

先ほど日が暮れ、月が昇った。

その筈なのに夜明けとはどういうことだろう。

クロウは不思議そうに首を傾げたが、カイが頭上に視線をやったのにつられて視線を上げる。

空に浮かんでいたのは、満月ではなく太陽だった。

眩しさに目を瞑っていたセフィアは、瞼を通して感じる光の質が変わったことに、ゆっくりと目を開けた。

光の波はだんだんと引いていつていたが、一点だけ、先ほどの光の洪水に引けをとらない眩しい輝きがある。

「太陽……」

空に浮かぶのは太陽。

眩しさに目を瞑ることはせず、目を細めるに留めてセフィアは呟く。

夜の領域から、昼の領域へ――

夜の闇を切り裂く夜明け。

それはセフィアにとって有利になったことを意味している。

けれど、日暮れから間を置かず夜明けを迎えたことに対する驚き

にセフィアは動けなかったのである。
そして。

驚きはそれだけではなかった。

「セフィア！ 後ろ！」

言われた声に、セフィアは反射的に振り返る。

「——！」

セフィア目掛けて振り下ろされた双剣を受け止める黒い影。

「大丈夫か、セフィア……」

黒い影の主は力いっぱい振り下ろされた双剣を弾き返し、セフィアに顔を向ける。

「クロウ……それに、さっきの声は——」

半信半疑。

まさにその言葉がしっくりくる思いで、セフィアは声を辿る。

「カイ」

セフィアは声の主の名を呼んだ。

カイの声に抱いた思いは驚喜。

そして——

目にした姿に抱いた思いは驚愕。

胸に受けた傷は致命的なものの筈なのに、カイの胸には傷も、
む血もない。

それに何より、カイの纏う空気が変わっているのである。カイとの付き合いは短いセフィアだが、これと同質の空気をセフィアは知っている。

そして、はたと気が付いた。

「そうか、そういうことか——」

ホルスにしてやられてような観が否めなかったが、少年が無事だったことを思えば安いものだ。

「何が、そういう事なのか知んねえが、光の波が収まったと思ってみれば夜の領域が昼の領域と化しちまつてるし、さっき仕留めたはずの坊主は復活してるし。これはお前の仕業なのかよ。ああ？」

ブオンッ！

と、言葉と共に空を切る大剣を綺麗にかわし、セフィアはクロウと背を合わせるようにして『誘い』に向けて短剣を構える。

「神子は俺の獲物だと言っただろう？」

『誘い』と向かい合うセフィアを見て取って、不機嫌そうに声をあげる『戦慄』。

「そんなこと言ってる場合かよ！ 昼の領域じゃ俺たちが不利なんだぞ」

その『戦慄』に怒鳴り返す『誘い』。

その様に、ふっとセフィアは口角を上げ、カイに笑い掛けた。

「カイ、今こそ、約束を守ろう。だから、もうしばらく力を貸して

くれ！」

「うん、セフィア。『太陽』はセフィアの味方だよ」

「ああ、心強い味方に違いない」

と、セフィアは呟く。

そして、ぶわっと辺りを包んだ殺気。

その殺気の主は、まるで自身と向かい合っているクロウなど目に入っていないかのように、鋭い視線をセフィアに向けていた。

「クロウ、少しでいい。『戦慄』の足止めを頼む」

「ああ、任せておけ。『誘い』の時は、疲れもあつて後れをとった^{おく}が、それなりに腕には自信がある」

肩越しにセフィアが言えば、クロウがそう返す。

心強い味方はカイだけではない。クロウもまた心強い味方だ。

「そういうことだ『変態』。お前の相手は、クロウ。そして、俺の相手は——『誘い』、お前だ。覚悟しろ」

セフィア 対 『宵の誘い』

クロウ 対 『真夜中の戦慄』

太陽の見守る下、戦いの火蓋が切って落とされた。

エピソード、という名のプロローグ

セフィアが舞っている。

否、実際には戦っているのだが、カイにはやはり舞っているようにしか見えなかった。

セフィアの動きが物語っているのだ。

世界を。

世界の深層での出来事を思い出しつつ、カイは戦う二人の姿から目を離さない。

あの少女の兄だというクロウ。

ホルスの神子だというセフィア。

そして――

太陽の瞳の力を宿す自分。

この出会いは始まりに過ぎないのだろう。

けれど、この始まりはきつと大きな意味を持っている。これから始まるであろう旅に向けての。

「これで終わりだ！」

と、セフィアの声。

眩い閃光と共に振り下ろされるセフィアの短剣が『誘い』の体を

捉える。太陽の光を宿し、その熱で温められた短剣をその身に受け、『誘い』は一際大きな叫びをあげた。

「ぐぬうあああああ」

その叫びと共に『誘い』の体は砂と化していく。
指先、爪先から順に崩れ、風に舞って散っていく。

「《薄明かり》の町の一件では、まんまと逃げられたが、今度はそうも行かないだろう？今度は確かにお前の本体に突き刺したのだから」

「くそっ！ どうして……」

崩れ行く体で、『誘い』が憎憎しげにセフィアを睨みつけた。

「どうしてわかったかって？うちの雇い主が、同じような小賢しい手を披露してくれたからな」

セフィアの言葉に耳を傾けていたカイは思わず苦笑をもらす。セフィアの雇い主・ホスルが披露した小賢しい手とは、自分のことだと察しが付いたからだ。

そんなカイの様子に気付いたセフィアも、カイに苦笑いを向けた。

「これで、この村に掛かった呪縛もとける……」

それに——とセフィアは言葉を続けた。

「クロウの方も、もう決着がつきそうだ」

目を向けた先には、昼の領域で攻防を繰り返す二人の夜の民。

二振りの剣から繰り出される不規則な斬撃を紙一重でかわしたクロウが、『戦慄』の懷に飛び込み、自らが手にした細身の剣の切っ先を『戦慄』の右肩目掛けて繰り出すところだった。

斬撃を繰り出す時に腕を伸ばしていたため、反応が遅れた『戦慄』はその攻撃を防ぎ切ることが出来ず、右肩に衝撃をくらう。

「くっ」

だらり、と右腕の力が抜け、コトリツ、と右手に持っていた剣を取りこぼす『戦慄』。

相手の右肩から剣を引き抜いたクロウは、そのまま『戦慄』の体を蹴り飛ばした。

ずざざざざざざざ——

体勢を立て直す暇もなく『戦慄』の体は数メートル飛び、余波で地面の上をさらに数メートル滑る。視界を覆うほどの砂埃が上がった。

「すごい！クロウもあんなに強かったんだ」

「まあ、仮にもあいつらが裏切り者と呼ぶ以上、あいつらと並ぶぐらいの地位や力を持っていたんだとしてもおかしくないさ」

「そう……だよね……」

「何だ、複雑な顔して。クロウが昔あいつらの仲間だったんだとしても、クロウがクロウであることに変わりはない。今俺たちの目の前にいるクロウは、俺たちの味方としてのクロウだろ？お前がカイであることにかわりがないように」

くすくす、とカイは笑う。

「セフィアったら、ホルスと同じこと言ってるや」
「そうか？」

「そうだよ」

「まあ、そう言われてもあんま嬉しくはないけどな。それより、クロウの戦いを見届けないと……」

「うん！」

二人は、ゆつくりと剣を構えたまま、歩を進めるクロウに目を戻す。

ちょうど砂埃が収まりを見せてきていて、二人はもちろんのこと、クロウもその中から手負いの『戦慄』の姿が浮かび上がるものだとばかり思っていた。

けれど、晴れた視界の中に『戦慄』の姿はどこにもない。

地に残されたのは、地を滑った跡と肩から滲み出たであろう血の跡だけ。

「腑抜けたと思っていた裏切り者も案外やるものだな。仲良しごっこをしているお前達に遅れをとったのは、認めたくないが、これ以上俺も昼の領域では遣りづらいから引かせてもらう。だが、俺と次に会うときまで、命は大切にしておけよ。遊び相手がいなくなっはつまらんからな」

姿の見えない『戦慄』の声がどこからか響く。

「ふん。負け惜しみなど聞きたくないね」

「セフィアの言う通り。容赦はしないぞ『戦慄』」

「容赦してもらわなくて結構。ただ、こちらもこれまでの様に生ぬるいことはしない、ということだ。今回の一件で『暁』も重い腰を上げるだろうからな。クロウ、『暁』の実力はお前がよく知っているだろう？」

「……………」

会話の節々に出てきた『暁』と言う名に、カイとセフィアは首を傾げ、クロウは無言で俯いた。

「お前が目論む、お姫様の救出を『暁』は全力で阻止するだろう。そして、神子による月の瞳の奪還の計画も同じことだ。闇の森を越え、お前達がこちらの領域に足を踏み入れたが最後、お前達の命はセトと『暁』の掌だと思え」

「それでも――」

と、カイは言う。

「俺達は行くよ。俺達の本当に大切なもののために」

カイの言葉に俯いていたクロウは顔を上げ、セフィアは表情を和らげる。

「そうだな。俺達には心強い味方『太陽』が付いている。夜の闇をも照らし夜明けを導く、その光が俺達のもとにある以上、恐れることはない」

セフィアがカイの頭を撫で言う。

「もとより、覚悟など、裏切った時に決めているさ」

クロウがカイの肩に手を置き言う。

「はん、いいだろう。まあ、そうでなければ、楽しくはないがな…
…精々、これからも楽しませてくれよ」

そう言い残して、『戦慄』の気配は完全に消え去った。

後に残された三人は互いに顔を見合わせる。しばらくすると、空からはカイが呼び寄せた太陽の姿は消え、夜の帳が戻ってきていた。けれども、村中に満ちていた呻き声はもう聞こえない。皆、悪夢から解放されて良い夢を見ていることだろう。そして。

これからの月の瞳を巡る旅を励ますように、丸く大きな満月が夜空に輝いていた。

エピソード、という名のプロローグ（後書き）

— 先ず、第一部完結です。

「colors」完成後、第二部「月の瞳」の執筆に掛かっていると思います。

その前に活動報告で設定裏話などを載せようかと思っているので、そちらもよろしく願います。

では、ここまでお付き合いいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9643k/>

太陽の瞳

2011年5月13日16時04分発行